
ブランシャール家の人びと

北津谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランシャール家の人びと

【Nコード】

N4197T

【作者名】

北津谷

【あらすじ】

フランスを舞台にしたバンパイア一族のお話です。

横柄で気性の激しい長男アルテュール、親から相手にされない努力家の次男クリストフ、世間知らずで夢想家の長女アレットの三人が一応の主人公。

物語は幼年期、思春期、青年期と分かれています。章単位のオムニバスなんですが、どう表示されるやら。

兄妹間の恋愛や、同性間の恋愛をほのめかす描写が含まれます。

プロローグ

なぜ人は生まれ、死んでゆくのかということは、今も昔も永遠のテーマだ。

愛もそれと同じで、人を愛する理由がはっきりしない限り、それについて語ることは許されない。だからこそ永遠のテーマになる。愛に理由が必要になる日が来ることはないからだ。理由もなく愛しいと思うからそこに愛情が伴うわけであり、もしそこに理由があればそもそも愛しいという気持ちも起こらないだろう。

異性であれ同性であれ、親であれ兄弟であれ、お互いに愛情を持つことは少しも不思議なことではない。もし家族であることに理由を求めるのなら、この社会はたちまち崩壊する。無条件に愛しいと思えなければ、それはもはや家族ではないからだ。

ラパール村の秘密（前書き）

将来的に出版社に提出するつもりで書いている「サンジェルマン伯爵と夕食会につき（仮）」の二章目のプロローグを一部使用しています。

ラパール村の秘密

フランスの西部、貿易都市に囲まれた小さな村ラパールを訪れた人は、決まって「あそこの人たちは陽気だけど、いつもどこかそよそしかつたな。顔色も悪かつたしね」と言うのだった。村ではさまざまな種類の花を栽培しており、毎年暖かいバカンスの季節になると、その花を一目見ようと、フランス中から大勢の人々が押し寄せてくる。特に六月に行われる「花祭り」という一大イベントでは、村の人口は普段の三倍にまで膨れ上がるのだった。

村の中心地には役場と教会　住人のほとんどがカトリック教徒だ　があり、村を東西南北と十字に区切る大通りの中でも、北から南に通る道はメインストリートと呼ばれ、歩行者たちが夏の強い日差しに苦しむことがないようにと、アーケード街に屋根が設置されていた。ほとんどの民家に花壇が設けられているため、村中どこを歩いていても花の良い香りが漂ってくる。

古く大きな造りの屋敷は村の北東部に集まっていたが、メインストリート沿いにも新しいアパートが建てられるようになった。それらのベランダにも当然鉢植えがつり下げられている。他の田舎の地域では若者が都会に出て行ってしまうことが深刻な問題になっているにも関わらず、この村の若者はほとんどが生まれ育ったこのラパールという土地に留まっていた。

村で最も古い姓はブランシャールといって、本家はサングヌーブという北東における特別居住区にあった。三百年も前からこの土地で生活しており、かつては彼らの発言一つで議会がひっくり返るほどの権力を持っていた。

田舎のぱつとしなかったラパール村を、国内でも指折りの花の観

光地へと押し上げたのは、かつての村長シモン・リュベンという男だった。彼はその偉業を称えられ、彼は四歳の時に両親と数人の親せきと共にオーストリアからこの村に移り住み、以来息を引き取るまでずっとこの村を離れなかった。オーストリアではルーベンスという姓だったが、フランスに移住したことによりフランス読みでリュベンと名乗るようになった。

シモンはその大らかな人柄も手伝って、人望を集めるのがとても上手く、村おこしのために演奏会やスポーツ大会を計画しては、その全てを巧みな話術をはじめとする交渉術で成功させた。おかげで村の住人はうなぎ上りに増え、気づけばリュベン家は村一番の富豪となっていた。彼は身なりに気を使う男で、どんなに朝早く訪ねようとも、そのくすんだ黄土色の髪に寝癖が付いていることはなかったし、彼は髭の一本にまで神経を張り巡らせていたようだった。それだけでなく品があり働き者で、どんな状況でも物事を冷静に見る能力があり、まさに絵に描いたような理想の村長だった。

しかし、ラパール村を訪れた観光客たちの言葉通り、この村の住人たちは、外部からやってきた者たちに対して決して心を開くことはなかったし、表面では親しげにしていたが、心の底ではよそ者たちを追い出たくてたまらなかった。なぜなら彼らには知られてはいけない大きな秘密があり、それが知られてしまふのを恐れているからだ。

ラパール村はフランス国内でも長寿の村として知られている。平均寿命は九十八・六歳。しかしそれは死亡届を偽装した場合の話で、実際の平均寿命は百四十歳以上とされている。中には二百歳生きたという例もある。これは珍しい話ではない。種明かしをすると、村長を含めて村人のほとんどがバンパイアなのだ。だからみんな顔が青白い。

ラパールだけではなく世界各地に、こうしたバンパイアが人口の大半を占める市町村がある。ドイツがどうかして純血の保存に尽力しているが、良い話は耳にしていない。スペインは二十年前に村自体が戦火に巻き込まれて消滅してしまった。六十年前にオランダに住む純血のバンパイアが提案した人との共存は、最近になってスウェーデンをはじめとする、北欧で活発に行われるようになった。

ラパールもかつては人の血が一滴も混じらない、純粹なバンパイアだけの村だったが、人との混血が進んだ結果、この村には純血種が今やごく僅かになってしまった。リュベン一家も、オーストリアで最後の一族になるのを恐れてこの村にやってきたのだ。

ブランシャール家について

かつては栄華を極めたブランシャール家も、時代の流れとともに歴史と伝統という重みに敷かれて、かび臭さを放つようになり、純血と混血の比率が逆転した頃から、その高貴な血の保存に関してはより神経質になっていった。

ブランシャール姓を名乗る最後の純血であり、とりわけ血を重んじていたエリーズは、同じ祖母を持つ従姉弟のロベールと自ら進んで婚姻関係を結んだ。血縁者同士の婚姻は決して珍しいことではなかったが、エリーズはロベールよりも三歳年上で、婚約当時二十歳だったロベールは、バンパイアとしての洗礼を受けてまだ一年も経っていなかった。エリーズは家柄、家庭内での発言力、屋敷の相続権、その全てにおいて夫より勝っていた。

夫婦は三人の子供たちに恵まれた。

結婚の翌々年に長男のアルテュールが、その翌年に次男のクリストフが、それから二年後に長女のアレットが生まれた。両親に似てくすんだブロンドの髪に、ブルーがかったグレーの瞳を持つアルテュールとアレットに対して、クリストフだけが祖父に似たブルネットの髪にグリーンの瞳をしていたのだ。

アルテュールは利発でエリーズに似て気性が激しかったが、反対にクリストフは物静かで温厚な少年だった。エリーズは二人の兄の気質をそれぞれ持ち合わせており、利発で思いやりがあった。

屋敷にはドニという禿げ上がった赤毛の痩せた男と、ジゼルという褐色で、背の高い若い娘を雇っていた。二人ともバンパイアにおける暗黙の了解　純血種以外のバンパイアは人間と寝てはいけない　を破ったため、顔の右頬に「p」という罪人の烙印が押され

ている。この黒く爛れた印を施されたバンパイアは、この先死ぬまで罪人として生活をしなければならなかった。

兄妹の中でも特にエリーズの思想をそのままそっくり受け継ぎ、何よりもバンパイアとしての誇りを重んじているクリストフは、この二人に対しては言葉に表現できないほどの嫌悪感を抱いていた。

ちょうど一昨年 of 春先に、現村長であるシモン・リュベンスが、有り余る財産で豪勢な屋敷を立てたため、ブランシャール邸は今や村で二番目の屋敷となってしまうたが、それでも家族五人と二人の使用人が暮らすには十分すぎるほどの広さがあつた。

改装を重ねてきたため、本来の外観はとうの昔に失われてしまつていたが、ブランシャール姓のバンパイアたちが、百年近く過ごしてきた家であることに変わりはない。約四十年前にエリーズが産声を上げたのは、二階のベッドルームのことだつた。

ラパール自体が広い村ではないため、移動に自動車は必要ない。そのためほとんどの家の脇にはいつも自転車が立てかけられていた。サングヌーブにあるブランシャールの屋敷の周りには、フェンスの代わりに背の低い木が植えられており、それが春先になるとまたきれいな花を咲かせる。花の公園で有名な村というだけあつて、村のほとんどの家庭に栽培の専門家がいた。

彼らの体温と同じくひんやりとした石造りの階段を上がると、リクライニングチェアが二つと、チェスボードを置くことのできるだろつ広いポーチに出る。そこには何も置かれていない。

年季の入つた真鍮のノブの両開き扉をくぐると、一階の部屋全てに通じるエントランスホールが出迎えてくれる。つい五年ほど前に屋敷内の明かりが電気に完全移行するまで、ホールを照らすシャンデリアをはじめとする、蝋燭の点灯はドニの仕事だつた。

アーチ続きのリビングルームからは、かつて花公園を一望できたのだが、公園の移転により今はアパートと小学校の外壁しか見えなくなってしまった。今は亡きエリーズの父親はソファに腰掛けて花を眺めながら、花の世話をする村娘たちを眺めるのが日課だった。そうやってぼんやりとソファに座っていると、育ち盛りの子供たちのために用意された料理の匂いが漂ってくる。エリーズがキッチンに立つことはなく、料理は専らドニカジゼルの役目だった。

子供たちには二階にそれぞれ一人部屋があてがわれた。長男のアルテュール、次男のクリストフには廊下を隔てて向かい合った部屋を。長女のアレットは階段から最も近い部屋を。部屋はそれぞれ三人の個性と、保護者からの愛情を見事に反映していた。

アルテュールは少年らしい、好みのはっきりとした部屋だった。棚にはおもちゃやサッカーボールが並び、形だけの勉強机はいつまで経っても真新しいのに、引き出しからはいつもスナック菓子の欠片や鉛筆の削りかすが大量に出てくる。そのためジゼルは彼の部屋を掃除したがらなくなった。

対照的にクリストフの部屋は、七十歳を過ぎた老人のような色彩に欠ける内装で、それは暗に彼のこの家での存在感の薄さを示していた。本棚には少ないお小遣いで買い揃えた冒険譚や伝記が並び、壁には家族の写真ばかりが貼られていた。

アレットの部屋は末っ子ながら、兄妹で最もお金が掛かっていた。絵画やベッド、本棚に勉強机といった高価な家具に、大量のぬいぐるみや絵本や人形は、アレットだけでなく兄たちの興味を引くのに十分だった。

そしていつからか兄妹たちは、アレットの部屋で遊ぶようになった。

幼い頃から母親からの愛情の差も手伝って、あまりそりの合わない

いアルテユールとクリストフは、アレットの部屋にいるときだけはお互いに仲良しになった。二人が喧嘩をはじめると妹が泣くからだ。しかしそれも長くは続かず、アルテユールが小学校に入学し、ここでの友だちと遊ぶようになると、兄妹たちの時間は減り、アルテユールとクリストフは言葉も交わさなくなった。

兄たちはお互いのいない時間を見計らってアレットを訪れるようになり、アルテユールはいつも覚えてたの遊びを妹に披露したが、彼女が笑ってくれない時はその度に彼女を叩いて泣かせた。

毎日夕方になるとエリーズはクリストフだけをキッチンに呼びつけて、理不尽な理由をつけて彼を叱った。部屋が汚いだの、妹を泣かせただの、生意気だの。そのほとんどが言いがかりだった。

エリーズはアルテユールが欲しがるものはなんでも買い与え、どんな悪戯にも目をつぶった。

そんな妻に対して、ロベールは長女を必要以上に可愛がった。彼女の部屋の家具やおもちゃは、全てロベールによるものだ。毎月アレットが生まれた日が来ると、洋服や人形や絵本をプレゼントした。ところがクリストフだけは何をしても両親から愛されず、見かねた叔父が彼を愛するようになった。クリストフにとって両親がしてくれたことは、この世に産み落としたことだけだったが、それでもクリストフは彼らを誰よりも愛し、兄として妹のアレットを可愛がった。クリストフにとってアレットは家族の中で唯一、優しく接してくれる存在だったからだ。

兄と妹（前書き）

兄妹間の恋愛をほのめかす描写があります。

兄と妹

アレットが小学校に入学すると、もうアルテュールは妹を叩くことを止め、今度は他人行儀に距離を置くようになった。なぜなら妹を可愛がるあまり、恋をしてしまったからだ。

*

アルテュールはアレットの部屋に入る度にこう思った。まるで夢の中にいるみたいだ、と。

桃色を基調にした上品で可憐な壁紙に、時折ランプの灯りが揺らめいている。花を摘む少女の絵画が掛けられているその下に、王族の姫君が眠るかのような豪華絢爛な、それでいて淑やかな天蓋つきのベッドがあり、その足元には手触りの良い柔らかい絨毯が敷かれている。

妹は暖炉際のアームチェアに腰掛けて、お気に入りの詩集に目を落としながら時々微笑んだ。アルテュールは胸が締め付けられるのを感じた。

「やあ、アレット」

後ろ手でドアを静かにアルテュールが問いかけると、アレットは勢いよく顔を上げた。くすんだブロンドの髪とグレーの瞳、そしてお辞儀をするように下を向いた鼻は、やはりブランシャール家の血縁者であることをはっきりと示していた。

アルテュールは彼女の顔にその特徴を確認するたびに、気持ち僅かに落胆させたが、その落胆は恋人の部屋を訪れるような、そんな錯覚からはつきりと目覚めさせてくれもした。

アレットの手の中にある詩集が、忌々しい実弟が彼女に買い与えたものだということに対する怒りを意識することで、アルテュール

はなんとか理性的になろうとした。しかし怒りという本能的な行動で、理性的になろうとするのは、いくらか矛盾している。

九歳の少年が七歳の妹に対して抱く感情としては、いささか熱を含みすぎているし、彼女が妹でないにしろ早熟だと思うかもしれない。だが、言葉を覚えたばかりの幼児だって「ジユ・テーム」を言うことが出来る。

「ルネが今日は天気がいいから外に出て遊んでおいで、って。それで百五十フランを私たちで分けなさいって。クリストフにはもう渡したの」

そう言ってアレットは本を閉じ、ライティングデスクの上に置いてあった財布から、五十フラン紙幣を取り出して兄に手渡した。

ルネはエリーズの異母弟で、兄妹たちからみれば叔父あたる人物だ。じきに三十歳になろうとしていたが、いまだ独身だった。彼にはバンパイアの血が半分流れているが、洗礼を受ける気は無いらしい。アルテュールはそんな叔父のスタイルを格好良いと思っていたが、エリーズは異母弟と顔を合わせるたびに、そのことについてプライドが無いだの恥さらしだのとよく口煩く怒鳴っていた。

彼はパッサージュ沿いのアパートで独り暮らしをしており、平日はメインストリート沿いの香水専門店で調香師として働き、休日になるとミサの帰りに実家に顔を出しては、甥や姪に小遣いや菓子を与えて可愛がった。彼だけが身内で、三人兄妹を分け隔てなく平等に扱っていた。

「それでルネは？」受け取ったコインを指で真上に弾いた。アレットは兄から目を離さずに、財布をゆっくりと閉じた。

「お母様たちのところに行くって。キッチンだと思うわ」

アルテュールはこの部屋に来る途中で、母親と誰かが言い争う声を聞いたことを、妹に打ち明けるべきか考えていた。エリーズが事あるごとに、ルネにクリストフと同じように言いがかりを付けて小

言を言い、ストレスの捌け口としていることを、アレットは知らないに違いない。アルテュールは口をつぐんだ。

「そうか。じゃあパッサージュに行こうかな」アルテュールはアレットの顔を伺った。「アレット、何が欲しい？」

「アルテュール、連れて行ってよ」

「キスしたらな」そう言うときささずアレットは、その青みがかったグレーの瞳で兄を見た。

アルテュールはこの先もこの言葉をしまっておくべきだと思っていた。が、ためらうことなく自分の唇を重ねてきた妹を見て、もっと早く言うべきだったとすぐに思った。妹が自分に対する気持ちが、兄としてなのか異性としてなのかまだグレーだが、これはアルテュールの大きな自信となった。

アルテュールが唇を開き彼女の、その甘美なる啞内に赤い舌を滑り込ませることは、決して難しいことではなかったに違いないが、アルテュールはただアレットの両肩を強く握るだけしかしなかった。兄として彼女をもう少しの間だけ、妹として扱わなければいけないと思ったからだ。

ブランシャール兄弟に共通して花園だったアレットの部屋を、真っ先に踏みにじったのは他でもないアルテュールだったが、彼にとって弟がどういう気持ちを抱こうが、エリーズがどんなにヒステリックに叫ぼうが、アレットさえ居ればそれでよかった。何もかもが上手くいくと思っていた。

彼女さえいれば血の保存に口うるさい、ブランシャール家のしきたりに、何かしらの突破口が見出せるのではないかと思ったからだ。

*

アレットの手を引いて廊下に出ると、クリストフの部屋から出てきたばかりの叔父を見つけた。ルネはいつも身なりに気を使わない

ため、今日も無造作に伸びたブルネットの髪を一つに束ねているだけだった。頬に剃り残した毛が何本も残っているのを見る度に、将来彼のような不精な大人にはなりたくないと思つた。アルテュールは心から思つた。

バンパイアの血を引いている子供たちは視力と嗅覚が鋭い。注意して嗅がなくなるとルネからは調香師という仕事のせい、毎日いくつもの匂いが混ざった、不協和音のような香りが漂ってくる。使い古して毛羽立っているトレンチコートからは、パンや下水や雪や泥といった街中の匂いがした。混血は日光に弱い。そのためか、フロントボタンは全て締めてあつた。

アルテュールとは反対に、クリストフは母であるエリーズの考えをそのまま自分の意見にしていたため、身内で唯一兄や妹と同じように扱ってくれるはずのルネとは関わりたがらなかった。幼い兄と弟は根本的に相容れなかったのだ。

だから、アルテュールは弟の部屋の廊下であるこの場所を、社交辞令的な挨拶だけしてさっさと通り過ぎようとしたのだが、優しいアレットは体の弱い兄の部屋の前で足を止めた。

「こんにちわルネ、さっきはどうもありがとう」アレットが叔父に会釈をした。「どうかしたの？」アレットはクリストフの部屋のドアをちらりと見つめた。

「倒れたんだ」そう言つたルネの濃いこげ茶色の髪が、肩をすくめて首を振つた拍子に揺れた。ヘーゼルの瞳は「クリストフ」と書かれた表札を見つめていた。

「また？」思わずアルテュールは口を開いた。

「そう、また。雪が降ってるし、そのせいかもしれない。はつきりとしたことはわからないな」思い出したようにルネは表札から目を離し、コートの埃を払つた。

その間アルテュールはルネの剃り残した髭の質感について考えていた。髪は柔らかそうだったが、髭は硬そうだ、とか。

「とにかくドニを呼んだよ」

アルテュールは弟が倒れたことにより、ルネにパッサージュと一緒にいこうと言う機会を失ってしまった気がした。クリストフに何かあると、ルネは必ず異母姉夫婦の代わりに必ず付き添うと言うからだ。

「今日はパッサージュに行こうと思ったのに……」アレットがぼつりと呟いた。

「そうだね、僕も残念だよ。後でジャン フィリップ神父に連絡しないといけない」ルネは意見を伺うようにアルテュールを見た。「パッサージュにはロマンと行ったらどうか。クリスマス休暇に入っているから帰ってきているだろ？」

「ロマン？ ドイツ人の？」

アルテュールはすかさず舌を出した、と同時に黒髪で二ヒルな笑顔が脳裏にさつと過ぎった。ロマンは村長の息子で、今は県外の中高一貫校に通っている。アルテュールよりも五歳年上の十四歳だ。小学校に入学したての頃、アルテュールは彼にバケツの水をかけられたことがあり、それ以来顔を合わせるのも嫌なほど、村一番の天敵だった。

「正確にはオーストリアだね。気取ったところがあるけど、良い子だと思うよ」

「嫌だ、嫌だ。絶対に嫌だ！」

「じゃあパッサージュには行けないね。残念だ」ルネは肩をすくめた。

「クリストフなんか放っておけばいいじゃないか」

「アルテュール、それは駄目よ」アレットは兄の手を戒めるかのように強く握り締めた。

アルテュールがすねたように乱暴に妹の手を振り払うと、それと丁度同時にドニが氷水を張った洗面器とピッチャー、グラス、それから毛布を持って階段を上ってきた。禿げた頭に汗が滲んでいるの

が見えた。荒い息に混じって、喉の奥からひゅっひゅっという音が聞こえてくる。ドニを嫌っているクリストフにしてみたら、彼が看病道具を持ってきたことは屈辱に違いない。

アルテュールは内心ほくそ笑んだ。ちなみにアルテュールはドニのことを普通の使用人のように思っていた。

「ありがとう、ドニ。助かったよ」

そう言っただけで微笑むと、ルネはクリストフの部屋のドアを開けてドニに入るよう促した。ドアの隙間から少しだけ見えたのは、ベッドにクリストフが横たわっている姿だった。

「パッサージュに行くならロマンに連絡をすること。いいね」ルネは兄妹が頷くまで二人を睨みつけた。二人が頷くと、今度はにっこりと微笑んだ。「もしよかったら教会に行っただけで、ジャン フィリッ プ神父に僕が手伝えないことも伝えてくれるかな？」

「わかった、伝えておくよ」アルテュールはアレットが教会で何をするのか、という質問をする前に彼女の言葉を遮って頷いた。

ルネが静かにドアを閉めると、アルテュールは階段を駆け下りて、エントランスホールの電話に向かった。この村にリュベン姓は一軒しかないため、電話帳名簿を開くとすぐに見つかった。

ロマン・リュベン

外に出ると、雪が薄っすらと降り積もっていた。地面に落ちると同時に、雪が解けてしまったため、積もりそうにはなかったが、それでもアレットは大はしゃぎだった。

ポーチで雪玉を作って遊んでいると、じきにロマンがやってきた。中学に通うようになり背が伸びたらしい。学校の指定なのか着ているダッフルコートは雨合羽のようで、色も苔色と色気がない。ポケットに手をつ込んで胸を張って歩いているのは、滑稽そのものだったが、どういうわけか様になっていた。

アルテュールは玄関にルネの傘を見つけたが、ロマンはバンパイアではないのか手ぶらだった。なぜルネがロマンと知り合いなのか疑問に思ったが、彼と話をしたくなかったため、アルテュールはそれについて考えることを止めた。相変わらずカールしている少し長めの黒髪には、ふけの様に積もっている雪が目立ったが、それも何かおしゃれのように見えてしまうほど、ロマンは格好良かった。

「よう　ずぶぬれ」唇を片側だけ吊り上げる笑い方は、水を掛けた時と全く変わっておらず、アルテュールは無意識に、アレットと繋いでいる手に力を込めた。

優しげに下がった目尻に、やや上を向きがちの鼻、微笑を浮かべているかのような薄い唇。その全てが絶妙なバランスで、しっかりとした、しかしまだ発達途中の骨格の顔に並べられているのだ。ラパールに住む子供たちの中で、ロマンは最も美しい顔立ちをしているし、誰もがそれを認めていた。

しかしアルテュールはロマンのその自信に満ちた、しかしニヒルな笑い方が大嫌いだった。見下されているような気がするからだ。「そっちは妹？」ロマンは顎でアレットを指した。

アルテュールはロマンのその仕草が気に入らなかったが、答えな

いわけにはいかなかったため、短くぶつきらばうに「そう」と答えた。

ロマンは何か企んでいるような顔で、アレットに微笑みかけ右手を差し出した。「はじめまして」

「おい、アレット」妹が応じて手を差し出そうとしたため、アルテュールがささず声を出した。

「どうしたの、お兄ちゃん？」ロマンはわざとらしくきょとんとした表情をして見せた。

「うるさい、黙れ」

アルテュールは妹の手を引き、パッサージュに続く道を大腿で進んだ。アレットは転びそうになりながら兄の歩幅に合わせて歩いたが、やはりロマンが気になるようで時々彼を振り返った。

ロマンは両手で頬を覆うと、しばらくその場から動かなかった。その間にも幼い兄妹は彼から遠ざかっていった。やがて何か考えが浮かんだかのようにため息をついくと、頬から手を離してやや駆け足で二人を追いかけた。

ロマンが隣に並んでいることに気づいたアルテュールは少し歩く足を速めた。

「おいアルテュール、転びそうだぞ」

「転ばない！」アルテュールはアレットを振り返ることなく答えた。しかしロマンの忠告通り、アレットは何度も足をもつれさせていた。しかしそれでも兄に合わせて必死に歩いていた。ロマンはしばらくアレットを見ていたが、アルテュールに視線を移して少し声を張り上げた。

「アルテュール！」

「うるさい！」

アルテュールがロマンに反発して手を離れた拍子に、アレットはぬかるんだ雪に足を滑らせてしまい、積もっていないむき出しの地面に勢いよく飛び込んだ。アルテュールが青ざめたのと、ロマンが

その端正な顔から感情を消したのは、ほとんど同時だった。

運良く転んだ場所は水溜りがなかったものの、アレットの服には泥と砂がべつとりとついてしまっていた。自分ひとりで立ち上がると、彼女は寒さで赤くなつた顔を歪めて、声を出さずに唇を噛み締めて、痛みを耐えながら静かに涙を流した。

アルテュールは妹の目線の高さまで腰を屈めて、彼女の服についた泥を払った。「どこが痛い？」

アレットは首を振った。下に兄弟のいないロマンはどうしていいやらわからず、コートのポケットに手をつ込んで、立ち尽くすことしかできなかった。

「おんぶは？」

アレットはしばらく兄を見つめてから、鼻を嚙つて頷いた。

「おんぶできるのか？ 代わるうか？」

「うるさい、黙れ」アルテュールは妹に背中を向けてしゃがみ、彼女が乗るのを待った。

ロマンはやれやれという顔で、アレットを背負ったアルテュールが立ち上がるのを眺めていた。彼の顔には片頬の吊り上った、やはりニヒルな笑顔が浮かんでいた。

パッサージュまで、あと百メートルといったところだった。

パッサージュは村で最も人の集まる場所だ。この通りにだけ食料品、衣料、薬、本などを取り扱う専門店が並び、村の流行りはいつもここから生まれる。しかし十歳以下の子供たちだけで来てはいけない、という決まりがあるため、中には十歳になるまでこの場所を訪れたことがなかったという子供もいる。ブランシャールの三兄妹は、何度も親やルネといった親戚の大人たちと一緒に訪れていたが、今回のようにロマンのような十代の子供とは来たことがなかった。

以前アルテュールは学校帰りに、同級生だけでパッサージュに潜り込もうとして、花屋の女将に見つかり追い返されたことがあった。

幸い学校には報告されなかったが、女将にこつぴどく叱られた。なぜ子供たちだけでパッサージュに行ってはいけないのかアルテュールは知らなかったし、大人たちも教えてくれなかった。

*

アルテュールはいつものように人で溢れかえり、活気に満ちたパッサージュを想像していたが、偶然今日は土曜日で、さらに一般的にクリスマスの飾り付けが行われる前日であるため、開いている店は数えるほどしかなかった。そのおかげで普段に比べ活気が無く、ショーウィンドウに飾り付けられたクリスマスリースが寂しく思えた。

村の大半がカトリック教徒だったが、ルネを除くブランシャール家の人々は、イエス・キリストを信じていないため、クリスマスとは全くの無縁だった。純血であることに誇りを持ちすぎるあまり、人の文化を拒絶しているからだ。だから、アルテュールやアレットはショーウィンドウに飾られている、もみの木を模った飾りものやパッサージュの中心に立っている装飾を施された木が、何を意味するのかもわからなかった。

パッサージュに到着する頃になると、アレットも泣き止んでいた。アルテュールの疲労も手伝って、彼女はまた自分の足で歩くことになった。

人通りが少ないため人とぶつかる危険はなかったが、アレットがクリスマスの飾りに釘付けになるたびに、アルテュールは彼女の手を強く引いた。エリーズはクリスマスを真っ向から否定していたが、クリスマスツリーを飾りおいしいものを食べて、年明けにプレゼントをもらうというクリスマスを、実を言うとアルテュールはうらやましく思っていた。

「君らの家だとクリスマスは珍しいのか？」ロマンがニヒルに笑っ

た。

「どういうところか知っているだろ。わかったら黙って紫の紐がついた輪つかでも飾っている」

「おいアルテュール、何か勘違いしていないか？」ロマンはコートのポケットから右手を出し、人を小ばかにしたような表情で、アルテュールを指差した。「言っとくけどうちはカトリックじゃないぞ」

「じゃあ何だ？ 正教か？ ヒンドウ教か？」

「馬鹿かお前は。帰るぞ」付き合っていられない、とても言いた気にロマンは首を振った。「うちもお前らのとこと一緒だよ」

「嘘だ」アルテュールは不信感を露に、目を細めてロマンをにらみつけた。

「嘘じゃない。ルネから聞いてないのか？」

「聞いてない」アルテュールは即答した。

ロマンは眉間に僅かにしわを寄せてアルテュールを見下ろした。

アレットは二人がやり取りをしている間、パッサージュの突き当たりで、きらきらと小さなライトを点滅させている、三メートルはあるのではないかという、大きなクリスマスツリーをじっと見つめていた。

「ルネは甥っ子に話をしているって言うてたが お前と妹の他に もう一人いるのか？」

「居るよ。弟が一人」

アルテュールが答えると、ようやくロマンは合点がいったようで、ため息をつきながら首を振った。アルテュールは気取り屋で、人を小ばかにするロマンが嫌いだった。

そして、彼と親愛なる叔父 ルネがどういった関係なのか知らないが、そこにクリストフが関わっていると知るなり、弟に対するどうしようもなく醜い感情が沸きあがってきた。弟は自分と妹の間だけでは飽き足らず、叔父の知人の間にまで割り込んで来るのだ。

「ルネとどんな話すんの？」アルテュールは純粋な好奇心から尋ねてみた。「友だち？」

「何だそれ」ロマンは片頬をつり上げて、まるで馬鹿にするように笑った。

「ルネはいつもうちには一人で来るし、誰と友だちなのかも全然教えてくれないんだ」

「確かにそういう節はあるな」ロマンはアルテュールとアレットをそれぞれ見た。「ところで弟はどうした？」

「家。寝てるよ　おい、話をはぐらかすな」

「おいアレット」

ロマンが呼びかけたものの、アレットはクリスマスツリーに未だに夢中で、返事さえしなかった。

ロマンは彼女の傍まで歩いていき、彼女と同じ目線になるように腰をかがめた。「おいしいクッキーを売っている店を知っている」恐ろしく丁寧な口調で、その上につこりと微笑んだ。「案内してあげよう」

九歳のアルテュールならまだしもロマンは十四歳だ。七歳のアレットを軽々と抱き上げて足を進めた。アルテュールは無視をするロマンにもそうだが、アレットが抵抗しないことにも腹を立てた。

「おいはぐらかすなよ。答えろ」アルテュールはその場で地団駄を踏んだが、ロマンは気にもせずには歩き続けた。「おい！」

「アルテュール」ロマンはその場で足を止めて振り返った。「ルネはお前には話したくない、ってことなんじゃないのか？　あいつが自分から言うのを待つしかないと思うけど」

そう言うつとロマンはまた歩き始めた。ルネがクリストフだけに打ち明けて、アルテュールやアレットには話をしないということに、理由があるということだろうか。クリストフはルネに秘密の話をしてももらえるほど、特別な何かを持っているだろうか。

アルテュールはロマンの色あせたダッフルコートの中を覗みつけて、彼の言ったことを理解しようとしたが、ロマンの言ったこと自体の意味がそもそもわからなかったし、頭も早々に考えることを

放棄してしまった。アルテュールは考えることに集中して、いつの間にか止まっていた足を、再び動かしてロマンを追いかけた。

「待てよ！ アレットを返せ！」

ロマンとアレットは黄色の看板が掲げられた店の前で立ち止まった。

本屋だ。

しかしショーウィンドウにはシャッターが下ろされており、開店しているようには思えない。店の出入り口には施錠されている。諦めて帰るしかないだろう、とアルテュールは内心せせら笑ったが、ロマンはお構いなしの様子でアレットを抱きなおすと、本屋とその隣の建物の間の細い通路へ足を進めた。

一般的に言う関係者以外立ち入り禁止の、つまり店を営んでいる家族たちの、プライベートルームへの抜け道である。しかし知人でもない人の家に入るには抵抗がある。アルテュールはロマンについて行くべきか悩んだが、アレットが彼と一緒に居るため、妹を置いてどこかに行くわけにはいかなかった。

本屋のマリ アンヌ、ロマンの夢

通路の先は二階に続く階段があり、ロマンは階段を上がってすぐの踊り場にいた。ベルを鳴らして、招き入れてもらうのを待っているところだった。階段を上りながら耳を澄ませると、家の奥から足音が聞こえてきた。玄関の戸を開けたのは、ブルネットの髪の短い女性だった。黄緑色のシャツに、クリーム色のカーディガンを羽織っている。玄関ポーチ兼階段の踊り場に、屋根が突き出しているのを見ると、彼女はもしかしたら混血なのかもしれないという考えが浮かんだ。

「あらロマンじゃない」黒いアイラインが引かれた彼女の目が、嬉しそうに細められた。「久しぶり」

「久しぶり、マリ アンヌ」そう言いながら、ロマンはアレットを下ろした。

「この子はどこの子？」彼女はアレットと同じ目線の高さにしゃがんで尋ねた。

「ブランシャールの本家の子」背筋を伸ばしながらロマンが答えた。

「それで、あいつがお兄さん」階段の踊り場の隅に立っているアルテュールを指差した。

「はじめまして」彼女は笑顔でアレットに片手を差し出した。「私はマリ アンヌ・ブシエよ。よろしくね」

「アレット・ブランシャールです」アレットははにかみながら、自分の手をマリ アンヌの手に重ねた。

「アルテュール、挨拶は？」ロマンがゆっくりと顎でマリ アンヌを指した。

「いちいちうるさい」アルテュールは顔をしかめた。「アルテュール・ブランシャール。よろしく」

「よろしく」マリ アンヌは寛容な笑顔で応えた。

玄関扉の外には大きなステンレスの傘立てがあり、雨傘が三本と日傘が一本あった。つまり、一人家族のうち誰か一人は、確実に混血ということだ。普段純血か混血か人か、ということをおまじ気にしないアルテュールだったが、バンパイアであるとロマンが先ほど打ち明けたばかりで、それに対する関心が普段よりも敏感になっていた。

玄関に入っただけ、上階に続く階段があった。三人は玄関の左手にあるリビングに案内された。位置からして店舗の、すぐ上の部屋だろう。窓際の壁に紫色のリボンが結ばれたリースが飾ってあった。中心には蝋燭が立てられている。おそらくマリ アンヌもカトリック教徒に違いない。

リビングの三人がけのソファに座るように促されて、ロマンはここが自宅であるかのように、真つ先に腰掛けた。アルテュールは一人掛けのソファに座ろうと思ったのだが、アレットがそこに座るといつて聞かなかったため、しぶしぶロマンの隣に腰を下ろした。二人の間には一人分の空間が空いていた。

奥の部屋から香ばしい匂いが漂ってきた。ロマンもバンパイアであるため、この匂いを嗅いでいるには違いなかったが、彼は全く気にも留めずに、水槽の金魚を眺めていた。アレットはというと、本棚から絵本を取り出して読んでいた。

じきにマリ アンヌが、バタークッキーとコーヒーを持ってやって来た。可憐な花柄のティーカップが、マリ アンヌのイメージに合っていないかった。

「ところでロマン、この間言っていたイギリスの本なんだけど、今は廃盤になっているみたいで　ちよつと、ため息つかないで。代わりを取り寄せたんだから」

「本当？」ロマンは眉をつり上げてマリ アンヌを見た。

「本当。でもちよつと難しい本みたいなんだけど、大丈夫？」

「多分、まあ大丈夫だと思う。ありがとう、マリ アンヌ」

ロマンがそう言うと、マリ アンヌは肩をすくめて微笑んだ。

アルテュールは二人のやり取りに耳を傾けようとしたが、それよりも熱いコーヒーに悪戦苦闘していた。マリ アンヌは気を利かせて薄いカフェ・アロンジェを出してくれたが、それでも渋いことには変わりがなく、角砂糖を三つ入れてみたのだが、それも気休め程度にしかならなかった。溶けきらないざらりとした甘ったるい砂糖と、頑固なコーヒーの渋味に堪えなければならず、アルテュールが涙目になりながらコーヒーに挑んでいる間、ロマンは勝ち誇ったような顔で 少なくともアルテュールにはそう見えた エスプレッソを飲んでいて。一方アレットはココアを飲んでご機嫌だった。

「 イギリスって、お前英語なんか読めるのか? 」

「 さあ」ロマンは肩をすくめた。「 お前には関係ない 」と言っているように思えた。

アルテュールが嫌いな仕草の一つだ。 どうしようもない反応に、アルテュールはマリ アンヌをちらりと見たが、彼女はアレットに大人が子供に対して、よくするジェスチャーをしているところだった。

「 フランス語だけじゃ生きていけない 」ロマンは真面目な顔で言った。「 中学に入ったらラテン語もしなくちゃいけないんだ 」

英語を勉強していることを包み隠さず話すあたりが、やはりロマンはフランス人とは違つとアルテュールは思った。 同時に中学に入學して、自分がラテン語を理解できるかどうか不安になった。

「 外国で暮らすのか? 」

「 俺の夢は サンジェルマンに会うことなんだ 」珍しくロマンの両頬が同時につり上がった。 嫌な印象を受けない笑顔だ。「 会って話したい。 彼みたいになりたい 」

「 ちよつと待て、サンジェルマンって誰だ? 」

「 十八世紀にヨーロッパに居たっていう人よ 」マリ アンヌが答えた。「 十一ヶ国語を喋ったとか、アレクサンダー大王と杯を交わしたとか、要するに天才で不死つてこと そうよね? 」

マリ アンヌの問いかけに、ロマンは静かに頷いた。「本名はオーギュスト・フォレ。作り話だつて言う人もいるけど、俺たちバンパイアもこうして現に存在するわけだし、可能性としてはあり得ると思うんだ」

「でもそいつが十一ヶ国語喋れるなら勉強する必要ないだろう」

「本を読むためだよ。全てがフランス語に翻訳されているわけじゃない。彼に会うまでに色んなことを勉強しておくんだ。錬金術、天文学、占星術、音楽、絵画、文学」

アルテュールは生まれて初めて、ロマンに尊敬の念を抱いた。人よりも知識があるため、高慢になつてしまつのかもれないが、きちんとした夢を持っており、そのために何をするか考えていたからだ。ロマンはまだ中学生にもかかわらずだ。

サンジェルマンについては胡散臭いものを感じたが、彼の気分を害してはいけないと思い、あえて口には出さなかった。同時に、あのロマンを夢中にさせるサンジェルマンとは、どういう人物なのかもっと知りたくなった。しかしここでロマンに質問をして答えを得るのはしやくなため、自分で調べてみることにした。

「あれ、ところでマリ アンヌ」アルテュールはクッキーを一つ掲げて見せた。「このクッキーって」

「気がついた？ 教会のクッキーはうちで作っているの。正確にはうちのお母さんだけだね」

アルテュールはクッキーをすかして見てみた。よくルネがミサの帰りに持ってきてくれる、バタークッキーそのものだった。

「教会 くそ！」アルテュールは突然声を上げた。「神父に伝えることがあつたんだつた」

「悪さしたのか？」ロマンが片頬をつり上げて笑った。

「うるさい、黙れ」アルテュールは顔をしかめた。

「ルネの欠席のこと？」ロマンはバタークッキーを齧った。

「あの人今日来ないの？」マリ アンヌの声はどこか嬉しそうだつ

た。

「弟が倒れたから面倒を見るらしいんだ」

「早く伝えたほうがいいかもね」コーヒーカップを傾けながら、マリ アンヌが言った。「今日の掃除で、あの人ステンドグラスを磨く担当だから。ほら、あれって高いでしょう？誰もしたがらないから」

時計を見ると十一時十分過ぎだった。マリ アンヌ曰く、教会の大掃除は十三時からはじまるらしい。早いところ神父に連絡をして、代役を見つけてもらう必要があった。

アルテュールはコーヒーを飲んでいるロマンを急かし、アレットから絵本を取り上げた。マリ アンヌはクッキーを三人分、それぞれに紙袋に入れて持たせてくれた。

「待つて」玄関を出るときになつて、アレットが口を開いた。「クリストフのお土産は？」

「また今度でいいだろ？」アルテュールはうんざりしたように答えた。

「今日じゃなきゃ駄目。絶対に待つてるよ」

「マリ アンヌ、今日お店開けられる？」ロマンが聞いた。

「大丈夫だけど クリストフよね？」マリ アンヌはアルテュールを見た。アルテュールはしぶしぶ頷いた。「ちょっと待つていてね。今あの子シリーズものを読んでいるから」

そう言つて、マリ アンヌは家の奥に消えていった。

少しして戻つてきたマリ アンヌの手には、一冊の子供向けの本があった。値段は約八十フラン。アレットは自分の財布から、ルネからもらったであろう五十フランを取り出した。まだ三十フラン足りない。アルテュールも全財産の二十五フラン出したが、残りの五フランが足りない。折角ルネからもらった五十フランを、財布に入れ忘れてしまったらしい。知り合いといえどもまけるわけにはいかず、マリ アンヌは苦い顔で兄妹を見守っていた。アレットとアル

テュールも次の機会にしようと思った矢先に、ロマンが残りの五フ
ランをさっと差し出した。

「後で返せよ」財布を閉じながらロマンが言った。

「ロマン、ありがとう」アレットが微笑んだ。

ロマンは照れくさそうにはにかんだ。マリ アンヌは気を利かせ
て、鮮やかな色紙で包装してくれた。アレットはそれを大切そうに
鞆にしまった。

マリ アンヌに見送られて、三人は教会へ向かった。

ジャン フィリップ神父

パッサージュから教会に抜ける道は、舗装されていないむき出しの地面で、雪が降り積もってぬかるみ、滑りやすくなっていた。アルテュールはアレットが転ばないように、彼女の手を強く握り締め、慎重に歩いた。

教会は村を十字に区切った北西部にあるため、パッサージュからはそう遠くない。マリ アンヌの家を出てからじきに、教会の屋根に掲げられた十字架が、すでに見えていた。

「なあ」「アルテュールはロマンをちらりと見た。「お前マリ アンヌが好きなのか？」

「まさか」ロマンは即答した。「何でそうなるんだ」

「でもマリ アンヌと話しているとき、すごく嬉しそうだったぞ」

「彼女とは友だちだよ」照れくさそうにロマンが笑った。「親父や姉貴に言えないことを彼女に相談している」

「例えば？」

「例えば、女の子との付き合い方とか」

「お前彼女居るの？」

「居ないよ。でもそういうのは時々で、いつもは人とバンパイアの生き方について　メーンストリートに屋根をつける話で少し騒いだだろう？　この村の人とバンパイアの比率が逆転して、混血が多くなったから屋根をつけましようってやつ。あれで反対したのはごく少数の純血だけだったって話。そこで今どき純血だからと頭を下げて当然、下げられて当然、っていう考えは古いと思う。という自分なりの意見を親父に話したら殴られかねないから、マリ アンヌにしている」

アルテュールはロマンの父親とエリーズは、話が合いそうだと思った。エリーズも混血を嫌悪しているし、人よりもバンパイアのほ

うが、位が高いと考えているからだ。ロマンの父親もロマンや彼の姉に対して、ヒステリックに叫ぶのだろうか。しかしあの温厚そうな村長が、激高する姿なんて想像もできなかった。

「お互い大変だな」

「お前が言うか」ロマンは片頬をつり上げて微笑んだ。

*

教会ではジャン フィリップ神父が、礼拝堂へ続く階段を掃いているところだった。彼がこの村の神父として赴任してから約二十年間経つが、おかげで教会はいつも綺麗な状態を保っている。

神父は足首まである、ロングスカートのような黒い服を身につけ、ロザリオを首から提げていた。ブランシャール兄妹もロマンも、キリスト教徒ではないため十字架の効果はない。

神父についてはルネがよく話してくれるため、どうい人物かは知っていたが、こうして神父と顔を合わせるのは今回が初めてだった。

「おや、珍しいお客さんだね」神父は手を止めてにこやかに言った。微笑んだ際に目じりにいく筋もの皺が寄った。彼の目がロマン、アルテュール、そしてアレットを見た。ロマンはここに何度か来ているのかもしれない。彼に対する神父の目が少し穏やかだったからだ。

子供たちはそれぞれに挨拶の言葉を口にした。

神父の笑顔には相手の気持ちを落ち着かせる何かがあった。自分を隠したがるルネが、ジャン フィリップ神父には包み隠さず全てを話している、という噂はあながち本当なのかもしれない。神父のような人が母親だったら、アルテュールが普段感じている家での違和感も覚えずに済むかもしれないと、つい考えてしまうほど彼は穏やかな雰囲気を持っていた。

それから少しの間、お互いに何か言い出すのではないか、という予想をしていたため言葉がなかった。アルテュールはロマンに小突かれて、ようやく本来の目的を思い出した。

「今日ルネが来られないみたいで、それで」

「そうか、それは残念だ。彼はよく働いてくれるからね　よし、代わりに探しておこう。ルネには気にしないようにと伝えてくれるかい？」

「わかりました」

三人はお辞儀をして教会を後にした。原則としてバンパイアは、教会の礼拝堂内に入ってはいけないという規則があるからだ。混血と洗礼を受けた混血はどういう措置を受けるのか、アルテュールは知らない。

礼拝堂に入りたいというよこしまな好奇心に負けて、アルテュールはルネの代わりに掃除を手伝わせてくださいと、言い出してしまふのを押さえることで必死だった。万が一そうだった場合は、間違いなくロマンが止めてくれるだろうという確信もあった。

神父に別れを告げると、三人は少し遠回りをしてサングヌーブに帰宅した。ロマンの暮らす新築のリュベン邸とブランシャール邸は、お互いに歩いて十分以内の場所にあった。

ラファラン・デュボア

九月。霧の立ち込めるパリ郊外のバス停で、一人の少年がバスを待っていた。

背が高いため、よく高校生と見間違えられてしまうが、彼　ラファラン・デュボアは今年中学に入学する九歳だ。市内の中学校では今日入学式が行われるが、開式するにはまだ三時間ほど早かった。ラファランは自分の腰ほどの高さのある、大きな革張りのトランクを体の横にぴったりと立てかけて、右手でその取っ手を用意深く握り締めていた。チエック柄のワイシャツの裾は、アイロン掛けされた紺色のスラックスに不器用に押し込まれていた。健康的な丸顔は、時折吹く冷たい風のせいで頬が紅潮している。こげ茶色の髪は刈り上げて、切りそろえられているにも関わらず、風にあおられるせいか、あるいは癖が強いせいか不自然な髪型になっていた。黒目勝ちのブラウンの瞳は、時々不安そうに左腕の時計を見つめた。

彼の他にバスを待っている客は居ない。

ラファランの叔母夫婦は、自ら進んで彼をバス停まで送る役目を買って出たが、バス停に到着するなり甥っ子を下して、そのまま角を曲がってどこかへ走り去ってしまった。ラファランは二人がどこへ行くか知っていた。人気のカフェテリアでモーニングコーヒを飲むのだ。叔母夫婦について日ごろからあまりよく思っていなかったため、今更失望もしなかった。

時刻表通りならば、あと五分後に到着するだろうバスに乗って、ラファランはアンナ・ヴェシエル学園に向かうことになっていた。アンナ・ヴェシエル学園はドイツのギムナジウム形式をとっており、十歳から十八歳までの八年間、教育を終えるまで、生徒は全員寄宿舎で共同生活をするという決まりがあった。一人っ子のラフ

アランにとって、同世代の子供たちと生活することは、言うまでもなく初めての経験だった。世間一般では名門として知られる学校だが、父親が教育熱心だったため、幸いにもラファランは小学校で成績不振で悩んだことはなかった。デュボワ氏は息子を政治家にしたがっていた。

デュボア夫妻は幼馴染だった。夫はパリの大学で、古典文学とは何たるかについて教えることが仕事だった。一方夫人は図書館で司書をしていた。古代ギリシア文学をきっかけに意気投合した二人は、その半年後に婚約した。ラファランが生まれたのはその翌々年のことだ。

デュボワ氏は、毎朝剃る髭の本数まで数えていそうなほど几帳面な性格で、その尖り過ぎた顎と細い眼鏡から想像する通り、神経質な面も持ち合わせていた。ラファランが父親といわれて真っ先に思いつくのは、「どうだ、すっかりやっているか」という彼の口癖だった。ラファランはその度に、小学校でした悪戯を思い出しながら、しかし父親に悪事を悟られないように気をつけながら、「もちろんです」と真顔で頷くのがあった。父親を堅苦しく思うときもあったが、同時に世界中で一番好きな大人の男でもあった。なぜそう思うのか理由はわからない。

*

時刻表から遅れること十分、ようやくバスがやってきた。

ロータリーでその大きな車体を旋回させ、徐々に速度を落とし、バス停の前で停車した。

ラファランはステップを一段一段登って、重いトランクを乗り入れた後、ジャケットのポケットからあらかじめ買っておいた切符を取り出した。運転手は人の良さそうな笑顔で切符を切った。

出勤時間には早いようで、大人は数人しか乗っていなかった。ざ

つと車内を見た限り、労働者ふうの、体格の良いオイルの臭いのする男。販売店員ふうの、接客好きそうな身なりの整った若い男。地方からやって来たらしい、余所行きの服を着た大荷物を抱えた中年の女。子供は大きなトランクを抱えて病人のような顔色をした、ライトブラウンの髪の少年ただ一人だけだった。彼は二人掛けの椅子に一人で腰かけていた。

ラファランは迷うことなく少年の座っているすぐ前の列に腰を下ろした。クッションは固く、椅子ではなく、薄い絨毯を敷いたフロアリングの上に腰掛けていたようだった。

バスはラファランの慣れ親しんだ通りを抜けて行った。彼は見慣れない景色に対して興奮したが、同時に寂しい気持ちにもさせられた。

マリウス・ハルフォール

ラファランが乗車してから十五分ほどが経ち、乗っていた大人たちが職場近くで下車すると、賑やかだった車内は真夜中のように静まり返ってしまった。小学校ではいつも喧騒の真っ只中にいたラファランにとって、この沈黙は耐えがたいものだった。

ラファランが前触れもなく、突然後ろを振り向くと、少年は驚いたように目を見開いて、無愛想にならない程度に口元だけ微笑むと、ぎこちなく視線を逸らした。

「やあ、寒いね」ラファランは出来る限り、明るい声色で言った。

「そうだね」少年は、注意しなければ聞き取れないほど小さな声でそっけなく呟いた。声色も暗かった。

肉付きがよく、背も平均より高いラファランに比べて、少年は小柄で少女のように華奢だった。一言で例えるのなら、味気が無くばさばさとしたスコーンだ。着ている服も古着屋で買ったような、使い古されたものだった。ジャケットは毛羽立ち、帽子からはほとれた糸が飛び出していた。薄い色素のせいで眉とまつげはほとんど見えず、顔の窪みに突然黒目があるようだった。耳は大きく、帽子を被っていても十分存在感があった。それにしても、どこか痛そうに顔をしかめているため、その唇からはフランス語ではなく、流暢なイギリス英語が聞こえてきそうだった。

ラファランは彼の横顔をじっと見つめた。学校への距離はそう遠くは無いが、始終無言でいられるほど近い距離でもない。この少年が喋り出しさえしてくれたら良いのだが、話しかけてもしない限り口を開きそうにはなかった。

「君も学校に行くの？」ラファランは思い切って聞いてみた。この時間帯に乗っているということは、少年の向かう場所が学校がパリからさほど遠くはないということだ。

「そうだよ」少年のヘーゼル色の瞳がラファランを見た。「君は？」
「アンナ・ヴェシエールに」

「僕もだ」少年は薄幸そうな顔で微笑んだ。そしてさっきよりも元気な声で言った。「僕はマリウス・ハルフォール」

「ラファラン・デュボア。よろしく」ラファランは背もたれ越しに右手を差し出した。

沈黙の登校は避けられそうだと、彼は心の中で一息ついた。マリウスはラファランの差し出した右手に、ためらいがちに自分の手を重ねた。マリウスの口角を少しだけつり上げる笑い方は、まるで女の子のようだった。

両足の間に、まるで骨董品店にでも置いていそうなほど年季の入ったトランクを挟んでいる。十歳そこそこの子供の持ち物にしては、いくらか渋すぎるデザインだ。

「悪さしたら鞭で打たれるぞ、って兄さんが言うんだ」兄の口調を真似してマリウスが言った。

先ほどよりも表情は明るく、ラファランともすっかり打ち解けていた。ラファランはマリウスの鞭を打つジェスチャーを、何度も繰り返して真似してはその度に笑い転がっていた。

「君の兄さんもアンナ・ヴェシエールに？」ラファランは涙を拭いながら訊ねた。

「ええっと」「マリウスの目線が宙を泳ぎ、自分の親指に留まった。」「兄さんはレストランの皿洗いをしているよ。いつもコックと喧嘩して帰ってくるんだ」

「勝つの？」ラファランは興味津々だった。

「そんなに強くないから 昨日なんて夕食後に帰ってきて、また青あざを作ってきたから、姉さんがかんかんで口論していたよ」

「姉さんもいるのか？」

「うん、二人ね。……あと弟と妹がいる」マリウスはまるで家の恥を口にするかのように、自嘲気味に笑った。「すごく貧乏だけど」

「六人兄妹か。いいなあ。マリウス、俺一人っ子なんだよ」

「僕は一人っ子がうらやましいよ」挙動不審にトランクの持ち手を弄りながら、運転席を見つめて言った。「ラファラン」

「まあ、人それぞれだな」

「そうだね」

*

ふと車窓を見ると、腹の出た背の高い中年男性が犬の散歩をしている姿が見えた。急いでいるのか、心なしか早歩きをしている。時々誰かに呼びかけるように口を開く彼の先には、オフィスに向かうのだろうか、ブロンドの髪を高い位置で結んだ、パンツスーツ姿の背の高い若い女性が歩いていった。

二人が歩いているのは、交差点に面した店舗の立ち並ぶ通りで、開店準備をしている店も多く見られた。信号の手前の歩道で、向かいの通りに行くために、大勢の人びとが地下へ続く階段を下っている。

二人の男女は親子だった。夫婦にも見えなくはないが、おそらく親子だろう。女性は怒った様子で早歩きをし、男性の方はいつの間にか諦めて、うなだれてゆっくりと歩いていた。散歩をしている犬は黒い短毛の中型犬で、どうやら雑種らしい。耳が垂れた尻尾の長い犬で、時折飼い主を心配するように男性の顔を覗き込んでいた。

二人を見ていると、ラファランは急に胸が苦しくなるのを感じた。この先クリスマスまで両親に会えないのだ。悪戯をする際に、父親の目を気にする必要はなくなったが、彼の代わりに叱ってくれるのは、他人である教師か、生徒代表の上級生のどちらかになる。家を出る際に母親が強く抱きしめたのは、そういう意味もあつたのかと思うと、もう少し別れを惜しむべきだったと後悔した。

バス内部の電光掲示板が、「アンナ・ヴィシエール学園前」を示したのと同じ頃、バスの運転手が「坊ちゃんたち次かい？」と声を

かけてきた。もちろん後ろを振り返るわけにはいかなかったため、バックミラー越しでの会話だった。

「そうだよ」ラファランが答えた。「あとのくらいで着くの？」

「五分ぐらいだな。新生か？ がんばれよ」

じきにバスは「アンナ・ヴィンシエル学園前」で止まった。

バス停があるのは学校の丁度横で、正門がある通りまでは短く見積もっても三百メートルはあるかのように思えた。

正門は角を曲がった先にあるため、直線の三百メートルと、角を曲がってから正門までの約百メートルを合わせると、少なくとも四百メートルは歩かなければいけないだろう。

映画スターの隠し子

バスの運転手に別れを告げると、ラファランとマリウスは、トランクを引きずって正門に向かった。時々上級生らしき男女が挨拶をしてきた。ラファランは威勢よく挨拶を返したのだが、マリウスはやはり控えめな挨拶をした。

新人生らしき姿も多く見られたが、そのほとんどが親に付き添われていた。むしろラファランやマリウスのように自分たちだけで校門をくぐる新人生の方が珍しかった。

「『アンナ・ヴィシエール学園前』って、ちつとも前じゃないよね」マリウスが口を開いた。

彼のトランクは、今にも分解してしまいそうなほどぼろぼろで、縫い目がほつれて中身が見えている部分もあった。キャスターはもはや役割を果たしておらず、しかし引きずるわけにもいかないため、マリウスは自分の身長約半分の高さのトランクを、その細い腕で抱えて運んでいた。彼の顔は紅潮し、それによってそばかすがより強調されていた。

「誰だって誤解しちゃうよ」息をつきながらマリウスは続けた。誤解を与えやすいバス停の表記に、この広い世界で最も腹を立てているのは彼のようなだ。「『アンナ・ヴィシエール学園前』よりも『アンナ・ヴィシエール学園横』とかさ。あるいは、『（ただし正門まで距離があります）』とかにするべきだよ　もう！　どうして取っ手が取れるかなあ」マリウスは大きなため息をつきながら目をぐるりと回した。

ラファランはじめ、マリウスの家が貧乏だという話を、衣食住は不自由なく出来るが、突然の高い買い物は出来ない程度のものだと思っていたが、彼のトランクの惨事を見る限りでは、どうやら思っていたよりも事態は深刻らしい。マリウスは学費の掛かる私立のアンナ・ヴェシエール学園に通うよりも、地元の公立学校で義務教

育を終えてすぐにも就職したほうが、自分をはじめとする家族の首を絞めずに済むのではないかと、他人の家のことながら考えてしまった。

「手伝おうか？」ラファランはマリウスの傍に駆け寄った。

「うっん、大丈夫。何とかなと思う」そう言ったマリウスの顔は、今にも泣き出しそうだった。「先に行ってもいいからね」そう言った時に、マリウスよりも背の低い、黒髪の少年が先を追い越していった。

「置いていくわけないだろう」ラファランはむっとして少し乱暴な口調で言った。「とりあえず道の隅に寄ろう」

マリウスのトランクを抱えて道の隅に寄ると、ラファランは自分のトランクを開けて、そこにマリウスの荷物を押し込んだ。家を出る前に詰め込んできた、雑誌や菓子や煙草やらが底の方で潰れたような音を出したが、それでもラファランはお構いなしにマリウスの擦り切れたシャツや下着や本を押し込んだ。マリウスのトランクのほつれは、最大で紙幣ほどの大きさがあったため、そこから出ない大きさの靴やスラックスや辞書などを除く全てが、ラファランのトランクに詰め込まれた。

今にもはち切れそうなトランクを引いて、ラファランとマリウスは再び歩きはじめた。

*

「必ず手紙を書いてね。週に一回は必ずね」しばらく歩いていると、後ろから女性の声が聞こえてきた。「何かあったらすぐに先生に言うのよ。もう、お母さん心配だわ。悪い友達に唆されちゃ駄目よ。アルテュール、あなたは本当に優しくていい子だから」
「ちゅ、という音が二回。」

おそらく新入生とその母親なのだろう。しかしそれにしても、まるでドラマに出てくるような親子だ。むず痒くなって笑うのを堪え

きれなくなつた、ラファランがマリウスを振り向くと、彼はまるで悪いことでもしていたかのように、慌ててそっぽを向いてしまった。

「少しおかしいな、マリウス」ラファランは耳打ちをした。

「僕が？」口をぽかんと開けて、マリウスは目を見開いた。

「違う。後ろの親子だよ」

そう言うつと、マリウスは無神経にも振り返つた。ラファランが肝を冷やしたのは言うまでもない。まだバスを乗り合わせただけの仲だったが、ラファランは彼が繊細なのがさつなのか判断しかねていた。それでも、時折見せる儂い表情が、憂いを帯びていることは確かだ。それともそれはイギリス人に似ているせいだろうか。

「どうだつた？」前を向いたマリウスに、ラファランはすかさず尋ねた。親子の会話　母親の一方的な言葉はいまだに続いていた。

「言葉に出来ない」よほど感動的だつたのか、マリウスの声は掠れていた。「いいから見てみて」

二度も振り返るのは失礼に当たるかもしれないと思つたが、それでも好奇心が勝ち、ラファランは振り返ることにした。チャンスは一度だけ　標識を確認する振りをして振り返つた。

「どう？」

マリウスの問いかけに、ラファランはただ頷くだけしか出来なかつた。先ほど見た映像を、頭の中でもう一度描いてみる。それは決して鮮明ではなかつたが、興奮はむしろ高ぶる一方だつた。

白い肌によく似合うくすんだブロンドの髪、青みがかつたグレーの瞳。少し厚めの唇に、やや下を向いているものの、彫刻のように非の打ち所のない形の鼻。一つ一つ思い出す度に、ラファランは自分がホモセクシャルだつたのかと疑問に思つてしまうほど胸が高鳴つた。高飛車そうな顔立ちだつたが、彼がもし女だつたのなら、きっと一目惚れしたに違いない。ラファランはその一瞬のうちに、アルテュールという少年が、実はとある有名な映画スターの隠し子で、素性を隠してこの学校に入学するのではないかと妄想した。それほど彼の顔は美しかったのだ。隣を歩いていた彼の母親も彼と同じく

くすんだブロンドで、美しい顔立ちをしていたが、それでも彼の足元には遠く及ばなかった。

「アルテュール」マリウスがそつと呟いた。

彼の名前はわが国を代表する、かの有名な詩人、アルテュール・ランボーと同じ名前だ。何度も彼の名前を呟いているマリウスは、ラファランよりももっと強い気持ちで、アルテュールと友だちになりたいと考えているに違いなかった。

アンナ・ヴェシエール学園

アンナ・ヴェシエール学園は今から約一五〇年前に、ジャン・ヴェシエールが女子の学力と社会的立場の向上を目指して創立した私立の学校である。アンナとはジャンの妻の名前で、彼が四十二才でこの世を去るまで、学長は夫婦二人が務めていた。

ちょうど五十年前に男女共学になり現在の学園の形となったが、その名残で生徒の比率は女子が六割とやや多く、男子トイレの数も生徒数に比べると少なかった。

校門をくぐると、正面　ちょうど管理棟の目の前の花壇の中央に、二人寄り添ったヴェシエール夫妻の銅像が立っており、どんなに鈍い来校者が訪れても、その姿を見つけられるようになっていて、雨や錆で多少浸食されているものの、二人の穏やかな微笑みは銅像が建てられた二十年前と全く変わることがなかった。銅像やこの学校を見て分かれるとおり、ヴェシエール夫妻はおしどり夫婦として知られていた。だから、この二十年もの間に、女子生徒たちの間ではこの銅像の前で恋人とキスをする、一生結ばれるというジンクスが出来たほどだ。

しかし、ラファランとマリウスの二人は、ほかの新生たちのように、校門をくぐってアンナ・ヴェシエール学園に入学できたことを噛みしめたりするどころではなかったため、夫妻の銅像には目もくれず、学生寮をひたすら目指していた。

*

「一年生は管理棟前に貼つてある部屋割表で、自分の部屋を確認すること」小柄で眼鏡を掛けた男性が声を張り上げた。「荷物を部屋に運んだら講堂に行きなさい」

管理棟前は一年生と思わしき生徒で、文字通りごったがえしていた。ブロンド、ジンジャー、ブラウン、ブルネット、ブラック、様々な頭が自分の部屋を探していた。

ピアスをしている子、背伸びをして化粧をしている女の子、太っている子、痩せている子、背の高い子、低い子。

部屋が見つけれないのか、今にも泣き出しそうな顔で、先ほどの男性教員に尋ねている黒髪の女の子もいる。

ラファランはすぐにマリウスの名前を見つけたが、隣にいたはずのマリウスは、いつの間にか見たこともないブロンドの太った男の子と入れ替わってしまっていた。ラファランは『マリウス・アレクサンドル・ハルフォール…東塔三十一』という文字を覚えようと、何度も声を出さずに唱えた。

ラファランが自分の部屋と名前を見つける頃には、他の生徒はすでに部屋を見つけたらしく、はじめに管理棟に集まっていた人数の半分以上に減っていた。

マリウスの荷物が半分入ったキャリーケースを引きずりながら、ラファランはこの先自分の家となる、東塔三十七を探した。

*

東塔の三階に上がると、新一年生の男子生徒たちは、寮の廊下で集まってお喋りをしていた。部屋に向かう途中で聞こえる声から、それらは同じ小学校の友だち同士や、今回の部屋割で同じ部屋になった同士など様々だった。それぞれ部屋のドアに、部屋の番号を示したプレートが貼ってあった。三十一と掲げられた部屋はドアが閉まっていたため、中の様子を見ることはできなかった。

三七は階段の隣に位置していた。誰が居るのだろうか、期待に胸を膨らませてドアを開けると、そこに居たのはくすんだブロンドに、青みがかかったグレーの瞳をした少年。先ほどのアルテュー

ルだった。

ラファランはドアを閉めるのも忘れて、部屋に足を踏み入れた。

部屋には左右に一床ずつベッドが壁に沿って置かれており、枕は廊下側に向けられていた。部屋に入って後ろを振り返ると、枕元にコートやジャケットなどを掛けるのに具合のよさそうな細長いクローゼットがそれぞれあった。壁はペンキだったが、この部屋を使った先輩たちにより、ところどころ白色に禿げ上がっていた。塗り替えるのは校則違反なのだろうか。ベッドの足元にある小さなテーブルには、アルテュールのもものと思わしき上着がすでに掛けられていた。ドアと丁度向かい合う位置に、ラファランの頭とほとんど同じ高さの窓があり、そこからグラウンドを一望することができた。窓にはレースのカーテンが掛けられている。窓に向かうように学習机が一つずつ置いてあった。窓の幅は机がちょうど二台おさまる大きさだった。その窓を中心に左右がそれぞれの部屋になるらしい。

ラファランは膨れ上がったトランクを右側の壁に立てかけた。心なしか部屋が全体的に土臭かった。

「俺はアルテュール・ブランシャール」横柄で言葉の端々に棘を感じるような言い方だった。「お前誰だ？」

「ラファラン・デュボア」ラファランはアルテュールとは対照的に、友好的な口調で答えた。横柄なアルテュールの態度が癪に障ったが、会って早々喧嘩するわけにはいかない。

「俺のはこっちでいいよな？」アルテュールは右側のベッドを指差し、ラファランの同意も聞かず続けた。「それからあまり音を立てるなよ。静かにしている。俺の物に触ったら容赦なく追い出してやる。あとは」

アルテュールの言葉はもはやラファランの耳には入っていないかった。きつとこの部屋における王者は、自分であるということを喋っているのだろうが、そんなことはどうでもよかった。ラファランは、

アルテュールの青白い顔をまっすぐに見つめながら、一体どうすれば彼を黙らせることができるか、それだけを考えていた。この映画スターの隠し子は、自分が特権階級なのだと勘違いしているのだ。親の七光りのくせに。

「おい」とラファランが呼びかけると、アルテュールは口を閉じて呼ばれた方を向いた。ラファランのダークブラウンの瞳と、彼の青みがかったグレーの瞳がかち合った。「ママが居なくても寝られるのか？」

色素の薄い眉がひそめられ、グレーの目が細くなり、青白い頬がぴくりと上下すると、アルテュールはおそらく利き手なのだろう。左手に握りこぶしを作った。ラファランは頬骨に直撃した衝撃で、鼻骨が僅かに振動したのを感じた。足を踏み外したのは、青白い顔を桃色に染めたアルテュールの顔を見てからだった。

ラファランは世間一般的に、相手を罵る際に口にする下品な言葉を吐き捨てると、アルテュールの襟元に飛び掛り、彼をワックスが掛けられたばかりのフローリングへと押し倒した。背中を打ちつけたせいでアルテュールの口から息が漏れたが、お構いなしにラファランは、彼のその嫌味なまでに整った頬に右の拳を打ちつけた。二人にとって、アンナ・ヴェシエール学園で過ごす八年間はもう決まったも同然だった。

アルテュールは馬乗りになっているラファランを押しつけようと、散々な悪態を吐きながら、膝と腕で応戦したが、ラファランはアルテュールの櫛の通された、くすんだブロンドの髪を左手で持ち上げ、四度目の拳を打ち込もうとした。

「何をしているんだ！」少年の掠れた声が部屋に響いた。「二人とも離れて壁に背をつける！」

お構いなしでラファランは最後の一発としてアルテュールを殴った。すかさず両腕を掴まれ、ラファランはアルテュールから引き離され、壁に背を打ち付けられた。腕を掴んでいたのは、背が高く黒

い髪をした男子生徒だった。顔の作りからしてどう考えても同級生には見えない。腕には「学年代表」を表す腕章をつけていた。

「君も早く」上級生はラファランを壁に押し付けたまま、顎でアルテュールに壁に立つように促した。「原因は？」

ドアの周りには人だかりが出来ていた。男子寮の塔であるため、当然のことながら女子生徒は居ない。ラファランはその中にマリウス姿を見つけた。背が低いせいで、中の様子が伺えないでいるらしい。ライトブラウンの髪が上下に跳ねていた。

「こつちを向くん」男子生徒がラファランに呼びかけた。「原因は何だったんだ？」

「知らない」ラファランはうんざりした口調で答えた。「知っているほど冷静なら、こんなことにはならないだろ」

「君は？ 怪我は無い？」上級生は聞こえなかった振りをしてアルテュールを見た。

「黙れ、構うな。失せろ」

上級生の顔はみるみるうちに赤くなっていった。ラファランは勝手にやってると心の中で唾を吐いた。

「入学式が終わったら寮長室に行くんだ。わかったな？ 今回は初めてだから寮監たちには黙っておくが、次はないと思えよ」

ラファランは返事をしなかった。上級生がアルテュールの方を見たため、彼も返事をしなかったのだとわかった。上級生は二人の新生活を気が済むまで睨みつけてから、襟元を正して大きな足音を立てて部屋から出て行った。彼はこの部屋の新生たちに対するいら立ちを、人だかりに向かって「解散しろ！」と叫ぶことで発散させたようだった。

そして、ようやく男子寮の新生たちは、本来の目的だった講堂に行くことになった。

人だかりが解散しても、マリウスだけはドアの前で留まっていた。アルテュールは部屋を出る際にわざとラファランの肩にぶつかっ

だが、ラファランは深呼吸して彼を殴ろうとした右手の拳を開いた。ラファランが廊下に出る時には、アルテュールは階段を上って渡り廊下に差し掛かっていた。

「マリウス、久しぶり」ラファランはマリウスの肩に手を置いて言っ
た。「探したぞ」

「僕もだよ」マリウスは肩をびくりと上下させながら微笑んだ。

「後で荷物持って行つてやるよ」

「ありがとう」そう言うと、マリウスは周囲に人がいないか確認して、声を潜めた。「それにしても驚いたよ。だってラファラン、君があ
のランボーと殴り合っているんだから」

「先が思いやられるな」ラファランは首を振ってマリウスの言葉を遮
った。

講堂にて

ほとんどの生徒たちが講堂へ移動する中で、マリウスは筆記用具を取りに三 七の部屋に戻った。

講堂へは階段を下りて渡り廊下を渡り、さらに階段を下りなければいけなかった。女子寮は男子寮とは違い、講堂の近くにあるため、こんな長い道のりをしなくても済むのにだ。

階段はリノリウムで覆われていた。踏み段の角に滑り止めが貼つてあるのは、まだ幼い新生たちを転落させないためだろう。壁はペンキで塗られていた。こちらは部屋のペンキとは違い、ひび割れ一つなくとてもきれいだった。しかし一度もたれてしまうと表面に噴き出した白い粉が服に付いてしまい、なかなか取れなかった。マリウスは知らずにもたれかかってしまい、渡り廊下にさしあたるまでの道のりで、相当いらついた様子で払い落としていた。

渡り廊下は男子寮と授業などで使う教室を繋いでおり、三階に当たる高さがあった。そこからは、右手には女子寮のベランダや裏庭の花壇、左手には広いグラウンドを望むことができたが、窓のさんにハエやクモが死んでいるのを見つけてしまったため、青空に輝く太陽と盛り上がっていた気分は一気に下降してしまった。

渡り廊下を出てすぐの階段を下りた一階が講堂だった。

講堂はワックスの掛けられた板張りの広い部屋で、上座にあたる場所には演説の際にでも使うのだらう、低い立派な舞台があった。

*

講堂にはすでに百以上の生徒たちと、十人以上の教員たちが居た。ざわついており、何度静かにするように言われても、声は一向に収まらなかった。

女子生徒はそれぞれ、三人から四人のグループを作って集まって座っていた。ラファランとマリウスは一緒に後ろの方に座った。先に到着していたアルテュールは、中央あたりに一人で腰を下ろしていた。

少し遅れて、上級生四人がやって来た。男子生徒と女子生徒が二人ずつで、その中には、先ほど寮でラファランを壁に押さえつけた男子生徒も混じっていた。ふくよかな中年の女性教員が、彼らに近づいて舞台を指差しながら、なにやら説明をはじめた。何についての説明かは声が聞こえなかったためわからない。

講堂のワックスの臭いに顔をしかめつつ、ラファランはマリウスと天井の染みや、個性的な外見をした教員についておしゃべりをした。

「顔、青あざができてるぞ」突然、目の前に座っていたブルネットの男子生徒が振り返った。「はい、これ」彼は二組のプリント用紙を差し出した。

「本当？」ラファランは受け取りながら聞き返した。

「目の下にね」彼は自分の右頬骨あたりを触った。

「どう？」プリントをマリウスに配りながら、彼にも聞いてみた。

「うん、あざになってる」マリウスはプリントに目を落としながら、ラファランの顔を見ずに答えた。「そこまで青くないけどね」

「それにしても、君すごいんだな」

男子生徒がラファランの顔をまじまじと見つめ、何度も頷きながら言った。ラファランははじめそれが何のことかわからなかったが、すぐにアルテュールとの殴り合いの喧嘩のことだとわかった。

「すごくないかよ」ラファランはプリントに目を落とした。『アンナ・ヴィシエール学園にようこそ！』と書かれてある。

「兄さんがこの六年生だけど、入学早々殴り合いの喧嘩なんて聞いたこと無いと思う！」

「とにかく落ち着けよ 名前は？」

「僕？」男子生徒は嬉々として答えた。「ラウル ミシエル・ドービニエ。ああ、君の名前は知っているよ。ラファランだろう？」ラウル ミシエルはラファランに微笑みかけると、マリウスを見た。「君は？」

「マリウス」マリウスは右手を差し出して微笑んだ。「よろしく、ラウル ミシエル」

握手を交わした直後、小柄で眼鏡をかけた男性教諭が近づいてきて、ラウル ミシエルとマリウスの頭を小突いた。

「君たちって同じ部屋なの？」教諭が遠ざかって行つたのを確認するなり、ラウル ミシエルが懲りずに訊ねた。

「違うよ」ラファランがアルテュールを見ながら答えた。「俺はあいつと一緒に」

「そう、マリウスは？」

「あれ」マリウスは左斜め前に座っている、小柄な黒髪の少年を指差した。「ジャン ポールと一緒に。ラウル ミシエルは？」

「あいつ フィリップ」顔をしかめながら、ブロンドで太り気味の男子生徒を指差した。

フィリップと指を差されたブロンドの少年は、同級生とは思えないほどとても太っていた。それだけでなく陰湿な雰囲気醸し出している。

「ご愁傷様」ラファランが上辺だけの微笑をした。

「できることなら、殴り合つて別の部屋にしてもらいたいよ」ラウル ミシエルがラファランを見た。

「今回は初犯だから、教師には黙っておくんだってさ」

「じゃあ次以降なら望みがあるわけだ」ラウル ミシエルはにやりと笑った。

「お前、他人事だからって」「ラファランはわざと大きなため息を吐いた。「険悪なんだぞ。事態は深刻だ」

ふと隣のマリウスを見ると、教師の言葉を一字一句聞き逃すまいと、ほとんどの生徒が聞いてはいないだろう話に、真剣に耳を傾け

ていた。ラファランは、まだ話し足りないそうなラウル ミシエルに、指をさして前を向くように促した。

*

ふくよかな中年の女性教諭が舞台に上った。それに続いて四人の上級生たちも舞台に乗った。

女性教諭は学校の制度や校則などについて、四人の見本を例にしながら説明していったが、ラウル ミシエルとおしゃべりに夢中でほとんど聞いていなかった。なによりも、彼女たちの言っていることは手元にある配られたばかりのプリント用紙に書いてあるため、後で確認しても同じことだ。しかし、やはりマリウスは熱心に耳を傾けていた。ほとんどの生徒が疲れて眠りかけているというのに、彼だけはメモまで取っていたからだ。

ラファランは退屈そうにプリントを手に取り、選択科目と必須科目の項目を読んでいた。公立学校でもこれほどの勉強をするのだろうか。

「今何の話してんだ？」ラファランが訊ねた。

「部屋番で教室が決まるんだってさ」マリウスはいささか早口で答えた。

「うわあ。最悪だな、それ」ラウル ミシエルがラファランの脇腹を小突いた。ラファランは舌を出して返事をした。

「学年代表は各学年に男女一人ずつ選ばれます」女性教諭が声を張り上げた。「四年生と八年生の学年代表は特に重要な役を任せられます。私の隣に並んでいる彼らがそうです。では、呼ばれたら前に出てきてください。ミレイユ・コストレ！」遠くに座っていた女子のグループから小柄で赤毛の女の子が立ち上がった。「ラウル ミシエル・ドービニエ！」

「はあ？」ラウル ミシエルは信じられないという表情をしていた。「ラウル ミシエル・ドービニエ、こちらに来なさい」女性教諭が

もう一度大きな声で叫んだ。

「まじかよ」ラウル ミシエルは頭をかきながら、とても面倒くさそうに舞台の方へと歩いて行った。

女性教諭は二人を指しながら言った。「これからは、何かあればこの二人を通じてお知らせします。ですが、代表と言ってあまり負担を掛けないようにしてくださいね。さあ、帰ってよろしい」教諭は二人の背中を押した。

「まさかお前が学年代表なんてね」ラファランはラウル ミシエルが戻ってくるなり横腹を小突いた。

「僕だって思いもなかったよ」ラウル ミシエルは顔をしかめた。誰だって面倒な学年代表なんてやりたくないに決まっている。「ところで、すごく熱心に話を聞いていたね。マリウス」

「え？」

マリウスは勢いよく振り返った。ラウル ミシエルが反復すると、彼は「そうだね」とだけ呟いた。ラウル ミシエルはまだ何か言いたそうだったが、結局何も言わずに口を閉じた。マリウスが誰にも踏み込むことのできない、口角をつり上げただけの、形だけの微笑みを浮かべたからだ。

ラファランは解散して講堂に向かう新入生の中で、またしてもアルテュール・ブランシャールを見つけてしまった。背は決して高くなく、他の平均的な男子生徒の身長と同じだったが、他の生徒には無い存在感が彼にはあった。相変わらず顎を少し上に向けた、高慢そうな態度をしている。彼の頬にあるかすり傷はラファランがつけたものに違いなかった。

ソレンヌへのラブレター

アンナ・ヴィシエール学園の新学期がはじまって、丸一か月が経とうとしていた。

十月になり雨が多くなり、生徒たちは廊下やフリースペース、あるいは部屋で過ごす時間が多くなった。勉強などのストレスを運動で発散することが出来ないため、頻繁に喧嘩や騒ぎを起こすようになり、それらの問題処理に追われた学年代表たちは、毎日疲れた表情を浮かべて食堂にやって来るのだった。

ラファランとアルテュールは入学式の一件以来、一言も言葉を交わさなかった。今でこそ顔を合わせたとしても、お互いに平生を保つことができたが、入学の晩や翌日の朝食時なんてものは、二人も、周囲の一年生たちも、いつ火花が吹き出るのか冷や冷やしていたものだった。

マリウスはおそらく学園一番の勉強家だった。他の生徒たちが、グラウンドでサッカーやキャッチボールに講じている間、彼だけは時間を見つけては図書館へ行き、授業の予習と復習をしていた。ラファランは彼の勉強ノートを見たことがあったが、気が遠くなるほど細かい字でびっしりと書き込まれていたのを覚えている。ラファランは彼をそれほどまでに勉強に向ける理由が知りたかったが、マリウスはいつも、異性のアプローチを曖昧に微笑んで受け流す、年上の女性のようにはぐらかすのが上手だったため、とうとう聞き出すことができなかった。

一年生の学年代表のラウル・ミシエルは、男子寮のリーダーそのものだった。学年代表としての忙しさもあって、本人は他に適任がいると常に嘆いていたが、彼以外に適任者はいなかった。頭の回転が速く、人望もあり、彼を憎んでいる人は誰も居ないと思えるほどだった。しかしそんな彼にも悩みはあった。同室のフィリップだ。

ラウル ミシエルはラファランとマリウスに会うたびに、彼がいかに陰気で付き合いが悪く、自分勝手なのかについて力説した。フィリップの性格についてはほとんどの生徒が知っていたため、あまり驚かなかったが、あのラウル ミシエルに嫌われるということは、いじめはもはや周囲の問題ではなく、フィリップ自身の問題だとはつきりしたも同然だった。

休日だけは、生徒たちは学校の敷地から出てもいいことになっていた。当然門限は決まっていたが、木曜日までにリストに名前を書き忘れさえしなければ、教員たちに特に叱られることもなかった。

ラファランははじめのうちはマリウスを外に誘っていたが、彼が首を縦に振らないとわかるなり、そういう行動をぴたりと止めた。彼は休日の朝は点呼が終わるなり、真っ先に部屋を出て彼の部屋に向かった。休日のほとんどをベッドに寝転がって本を読んだり、嫌いな教師の悪口を言ったり、時々顔を出すラウル ミシエルと、くすぐりあったりして過ごした。マリウスは時々教科書を閉じておしやべりに参加したが、それでも一週間のうち、一度も休まずに全ての時間を勉強に費やすのは少し異常だった。

「マリウス、たまには外に来いよな」

ラウル ミシエルのフィリップに対する不満を早々に打ち切って、ラファランが言った。

最近ラウル ミシエルは相当ストレスが溜まっているのか、口を開くたびにフィリップの不平ばかりを言っていた。二人が喧嘩をして部屋を分かれさせられるのは、時間の問題ではないかと思えるほどだ。

「うん、そうだね」マリウスは上の空で返事をし、また教科書を開いた。「考えておくよ あ！」

教科書から一枚のわら半紙が落ちてきた。それはひらひらとラウル ミシエルの足元に落ちた。彼は迷うことなくそれを拾い上げ、書かれている数行の文章に目を落とすことなく、マリウスの顔を

伺った。マリウスの表情次第で読むべきか、読まざるべきかを判断するつもりだった。

「返して！」

マリウスは目だけを動かして、一瞬ラファランを見るなり、すぐさまラウル ミシエルに視線を戻し、必死の形相で叫んだ。声は掠れていた。ラウル ミシエルは何も言わずに、文字が書かれていない方を表にして、マリウスに返そうと差し出した。

「マリウス」ラファランが穏やかな声で呼びかけると、マリウスの体は拳動不審者のようにびくりと跳ね上がった。「お前が書いたのか？」

「何が？」マリウスは俯いていた。

ラファランはラウル ミシエルからわら半紙を取り上げ、淡々と詩を読み上げた。読み上げている間、マリウスの顔は瞬く間に赤く染まっていき、髪では隠しきれない大きな耳まで真っ赤になつていった。ラウル ミシエルは何度かラファランを止めようとしたが、そのうち詩に聞き入ってしまったようだった。

「最悪だ」マリウスが呟いた。「最悪。まさか読むなんてひどいよ、ラファラン……」

「最悪でも、ひどくもない。良い詩だ」強い口調でラファランが言った。「親父が読んでいるギリシア古典なんかよりも、ずっと良い」

「ラファランに同じく」ラウル ミシエルはラファランに負けない程、はつきりとした声で言った。

「ありがとう」マリウスは誰とも目を合わせずに微笑んだ。「でも、ジャン ポールが勝手に読んだ時に言ったんだ。気味が悪い、って。お前は本当に男なのか、って」

「殴ってきてやろうか？」ラファランがすかさず言った。

「あとが気まづくなるよ」マリウスは首を振った。ラウル ミシエルがくすりと笑った。

「他には無いの？」ラウル ミシエルは身を乗り出すように、ベッドサイドからわずかに腰を浮かせていた。

「何が？」マリウスはラウル ミシエルを振り向いた。「ジャンポールに対する不満？ 彼とっても素敵な人だからね。たくさんあるよ」

「違うよ。詩だよ」

「あるにはあるけど、ないよ」教科書にわら半紙を閉じて、マリウスは首を振った。「恥ずかしくて見せられない」

「せいぜいソレンヌに読まれないことだな」ラファランが悪戯っぽく笑った。八重歯がちらりと見えた。

ラファランは冗談のつもりで言ったのだが、マリウスは諦めが混じったため息を吐きながら、「そうだね」と答えただけだった。ラウル ミシエルも不思議に思ったようだ。彼と目が合うと、ラファランはわからないといった様子で肩をすくめた。

ルームメイトの噂（前書き）

未成年の喫煙描写がありますが、そういった行為を推奨しているわけではありません。あくまでも演出の一つとしてなので、ご理解いただけるとありがたいです。

ルームメイトの噂

食堂での食事は毎朝七時から八時までの一時間と、十二時から一時までの一時間、六時から七時までの一時間と決められていた。食堂は全学年の生徒が座っても満席になることはなかったが、ほとんどの生徒たちは早めに来るか、遅くに来るかどちらかだった。必ずこれらの時間内に食堂に行つて、無理にでも食べなければいけないというわけではなかったが、食べても食べなくても、食費は同じように学費から差し引かれた。また、おやつなどは授業の最中ではなかったら、いつでも食べることを許されていた。

食堂は管理棟の二階、つまり講堂の真上にあつた。

食事を用意するのは、学園の管理者が選んだ調理師十数名と一人の管理栄養士で、生徒たちは食堂に入つてすぐのテーブルの上にあるトレイを持って、ベルトコンベアに乗せられた機械部品のように列を作り、厨房と食堂を区切るカウンターを通りながらスープやパンやサラダなどを受け取るシステムになっていた。

マリウスと同室の、小柄で眼鏡をかけた黒髪のジャン・ポールは、自分が早く目覚めるのを利用して、それを商売にすることを思いついた。彼は毎朝六時五十五分頃に食堂へ行き、調理師たちが朝食の配膳準備を終えたと同時に、一人にも関わらず眺めの一番良い六人掛けのテーブルでゆっくりと朝食をはじめ、生徒たちで最も混雑する二十分ごろにその席を後から来た誰かに売るのが、彼はそうして町へ出かける小遣いや、おいしいおやつ、レポートを書くために必要な図書館の本を真つ先に貸りることのできる権利、あるいは万が一いじめられたときのためのコネやボディーガードなどを得るのだつた。

ラファランやマリウス、ラウル・ミシェルたちは、そういう手段

を一度も使ったことがなかった。運が良ければテーブルで、悪ければ満席の中で立って食事をした。

アルテュール・ブランシャールはいつも一人で行動をしていた。はじめのうちは素行の悪そうな数人の同級生たちと行動していたが、どちらから離れていったのか、一週間もしないうちに彼は一人になった。元々誰かとつるむとかそういったことが嫌いな性分なのかもしれないが、同級生の男子生徒たちは、彼の外見に黙って頬を染めるだけの女子生徒たちとは違い、ただ友だちがいなただけなのだろうと思っていた。

*

その日、マリウスは朝から顔色が悪かったが、ラファランが止めても彼は授業に出席した。今にも倒れてしまいそうだったが、マリウスはこういう時に限って厄介な頑固さを見せて、とうとう終業のベルが鳴るまで、彼は授業に出席し続けた。終わってから、それまで耐えていたラウル ミシエルが怒りを爆発させ、彼を引きずって医務室へ向かった。

「六時半までに戻らなかったら、悪いけど先に食堂に行ってくれろ？」医務室に向かう廊下を歩きはじめたラウル ミシエルが、突然振り返って言った。

「ああ。わかったよ」

ラファランは二人の姿が見えなくなってから、やっと自分を含めて三人分の教科書と筆記用具 加えてマリウスは毎日辞典とラテン語の文法書を持ち歩いていた を押し付けられたことに気づいたのだった。

結局ラウル ミシエルとマリウスは時間までには帰ってこなかったため、ラファランはアンナ・ヴェシエール学園に入学して以来、

はじめて一人で食事を取ることになった。小学校と変わらずに、ラファランにはこの学校でも気さくに話しかけてくれる友人たちがあの二人の他にもいたが、彼らはいまだに、ことあるごとにアルテュールとの殴り合いの話を聞きたがるため、内心彼はうんざりしていた。

食事を終えると、ラファランは食堂での友人たちにさよならを告げて、普段ならグラウンドや渡り廊下などに寄り道をするのだが、今日はまっすぐ寮へと向かった。途中で医務室に行つてマリウスの様子でも聞きに行こうかとも思ったが、入れ違いになつてしまう可能性があつたため、それはやめておいた。

渡り廊下を歩いているときに、裏庭の花壇の隅でラウル ミシエルの兄がガールフレンドとキスをしている姿が偶然目に入つたが、その瞬間に、伯母夫婦が普段恥じらいも持たずに、いつでもどこでも人目をはばかることなく、熱いキスを交わしていたのを思い出してしまい、彼は心の中で顔をしかめた。

前を見ると、渡り廊下の端からラファランの次に背の高い、同じ一年生のジャックが歩いて来るところだった。筋肉質で喧嘩が強そうな体格をしているが、彼は平和主義者で、その拳をむやみに振り回すような男ではなかった。隣には絵の模写が上手いと噂の、針金のように細いジョルジュを連れていた。二人ともおしゃべりに夢中で、まだラファランには気づいていないらしい。

「アルテュール・ブランシャールはだめだと思つな」ジャックが言った。「愛想も悪いし、性格も悪い。なんか偉そうだな。この間だつて声かけてたら無視したんだ」

「無視はよくするよね。僕もちよつとつつきにくいかなつて思つてる」ジョルジュはそう言つて相槌を打った。

「よう」ラファランが声をかけた。

ジャックとジョルジュの二人は、学年代表にでも声を掛けられたかのように驚いた顔をしたが、すぐに笑顔で返事をしてくれた。

「これから戻るのかい？」 ジョルジュが訊ねる。

「ああ。お前らは？ これからメシか？」

「まあな」 ジャックが答えた。「混んでたか？」

「そこそこな」 ラファランはジャックの厚い肩を叩きながら言った。
「じゃあな。ジョルジュもな」 ジョルジュは振り返って手を振っていた。

その時、ラファランは自分の考えがごく一般的な同級生と、何一つ変わらないことを再確認した。現に彼らの言うように、アルテュール・ブランシャールは孤立しつつあった。本人は気づいていないようだが、気づくのは時間の問題に違いない。しかし、確かにラファランはアルテュールと殴り合いの喧嘩をしたが、心底彼が憎いわけでも、嫌いなわけでもなかった。ただ、態度が癪に障るだけだった。

噂話を頭の中で何度も繰り返し再生しながら、ラファランはこのことをアルテュール自身に知られてはならないとも考えていた。彼の孤立に拍車をかけることは明らかだからだ。

ラファランは東棟三 七に到着すると、ポケットから鍵を取り出した。飾り気の無い鍵だ。女子生徒はほとんどといっていいほど、キーホルダーをつけていた。

ラファランのベッドは左側だった。掛け布団もシーツの乱れも、朝起きたそのままだ。シーツを換えるのは毎週水曜日と決まっていた。広まりつつあるアルテュールへの不満を、本人に知られないようにするにはどうしたら良いか、ラファランは頭を回転させて考えた。考えようとしたが、本人のことを良く知らないため事態は難航した。もう少し様子を見ても悪くないだろうか。そんな考えがふと浮かんで、すぐに除外したが、結局そうするのが最良の手段とも思えた。

ラファランは無意識に、トランクから出発の前々日に義叔父の上着から拝借したジタンを取り出していた。父も喫煙していたが、煙草の残り本数をきっちり覚えていたような人だったため、ラファランがいつも拝借するのは叔父の上着からだった。

口に啜えて火の灯ったライターを近づけると、じゅう、という音と共に煙が立ちこめ、二酸化炭素が頭蓋骨を満たした。吐き出した息は白く、空中に広がり、もやとなって消えていった。

そのうち、どうすればアルテュールに知られないかという考えは、煙と同じようにどこかへ消えてしまい、倦怠感と、心地よい酸素不足がラファランの頭の中から指先までを満たした。

無用心に施錠されていないドアが突然開いたときは、流石のラファランも飛び上がった。ドアに目をやると、顔をしかめたアルテュールが立っていた。くすんだブロンズが煙を吸って、さらにくすむのを想像しながら、ラファランは何を言おうか考えていた。アルテュールに対してそう思ったのは殴りあう寸前が最初で最後だったから、奇妙な気持ちにはなっていた。

アルテュールはラファランを避けて部屋の中を見回した。全てを見終わってからようやくラファランを見ると、「一本くれ」とだけ言った。相変わらず高慢そうな言い方だった。あるいは、彼はそういう言い方しか知らないのかもしれない。

ラファランは枕元の煙草ケースから一本取り出して彼に差し出した。「ライターは？」

「貸してくれるか？」アルテュールははじめて謙虚に答えた。

些細なことだったが、ラファランは奇妙な連帯感を覚えた。彼が喫煙を告げ口しなかったからという理由ではなく、同じ場所で同じ銘柄の煙草を吸うことに何かしらの大きな意味があるように感じられたからだ。

二階廊下の奇襲

昨晚、三三の坊主頭のレミー・マルローが上級生による洗礼を受けたというニュースは、あつという間に一年生の男子生徒たちに知れ渡った。マルローは否定していたが、同じ部屋のジャン・ジャック・モーリアが着替える時に、彼の背中に青く腫れた痣があつたと証言した。マルローは先週家族からチョコレート^{*}の詰め合わせを届けられたばかりで、ことあるごとにそのことを自慢していたのだが、今朝はちつとも話題に出さず、その代わり五年生のある男子生徒が食堂で仲間たちとチョコレート^{*}を頬張っていた姿が目撃された。

毎朝九時に授業が始まる前に、寮の掲示板に学年代表によつて荷物を届けられた生徒の名前が書かれた紙が貼り出されるのだが、マルローの名前は頻繁に上がっていた。アルテュール・ブランシャールは三番目に多かつた。

*

「狙われた理由がチョコレートなら、僕には関係のない話かな」マリウス・ハルフォールは寝不足なのか、あくびをしながら言った。英語の授業の帰り道だった。ラファラン、マリウス、ラウル、ミシェルといういつものメンバーで、女子生徒の四人グループを挟んで、五メートルほど先にアルテュール・ブランシャールが一人歩いている。

次の授業は国語で、普段なら同じ教室で授業が行われるため、移動する必要はないのだが、今回は特別に図書室で行うことになっていた。

「荷物なんてまず届かないし」マリウスは皮肉っぽく言った。

「それで、誰にやられたって？」ラファランがラウル・ミシエルに

訊ねた。

「僕もよくわからないけど、情報屋が言うには『アンサーニユ（看板）』っていう赤毛の五年生だつてさ」

「情報屋つて？」

「ジャン ポール」ラウル ミシエルはちらりとマリウスを見ながら答えた。「席売ってるのもあつて、いろいろ詳しいんだ」

マリウスは顔をしかめた。「人のものも勝手に使うけどね」

「殴つてやろうか？」ラファランが笑いながら握り拳を作った。

「うーん……まだ大丈夫かな」

「いつも一人だし、ブランシャールが目つけられてなきやいいけど」ラウル ミシエルがそつと呟いた。

*

国語の授業の後、ラファランが男子トイレに行くと、入れ違いで三人の上級生が出てきた。太った男、小柄な男、背が高く体格の良い男、一人は坊主で赤毛だった。そのまま彼らは廊下に響き渡るような大きな声で、下らないおしゃべりをしながら、男子寮へ続く階段を下りていった。

トイレはまだ放課後の掃除の時間ではないにも関わらず、床が水浸しになっていた。隅の個室のドアはモップで固定され、内側からは開けられないようになっていた。

陰湿ないじめの現場に違いないとラファランは直感した。

ラファランはシューズと靴下を脱いで、靴下をスラックスのポケットに、シューズを洗面台に置くと、スラックスの裾をたくし上げて、水浸しの中をばしゃばしゃと水をかき分けて、問題の個室へと歩いていった。

力づくでモップを外すと、ドアは内側へ開いた。くすんだブロンズの髪をした少年がカバーを下ろした便座に座っていた。頭のとっぺんからつま先までずぶ濡れで、足元にはカバンごと水浸しの真新

しい教科書やノートが散らばっている。

「ブランシャールか？」ラファランが聞いた。

アルテュールは重たそうに頭を上げると、その青みがかったグレイの瞳でラファランを見た。「タバコ持っていないか？」

「持つてゐるわけないだろ。授業だぞ」

そう言うのと、アルテュールは怒って八つ当たりをするかのように、ラファランへ何かを放り投げた。黄色の背景に大きな赤い文字で、「バベットの店」と書かれたブック・マッチだった。

「お前、こんな店行ったことあるのかよ」ラファランはマッチを突き返した。

「さっきの奴から取ったんだよ」アルテュールは得意げに言った。水をかけられた拳句閉じ込められたにも関わらず、全く気にしていないようだった。「『こんな店』ってどんな店だ？」

ラファランは顔をそらして、小さな声で言った。「大人の店」

「パリじゃ有名なのか？」アルテュールは長い犬歯を見せつけるように笑いながら、前髪をかき上げた。

「知るか。それで、さっきの奴って、もしかして、ええっと アンサーニユとかいう……」

「そんな風に呼ばれてたなあ」アルテュールは便座から立ち上がった。「うげ、今日はパンツまで濡れてら……」

「前にも水かけられたって」

アルテュールはラファランの言葉を遮った。「それはそうと、ジダンの誓いだ。誰にも言うなよ。これはおれの問題だからな。言ったら殺してやる」

アルテュールの長い犬歯を眺めながら、ラファランはふと良いことを思いついた。「次の授業、遅刻するか」

「別にいいけど」アルテュールは肩をすくめた。「お前、親友のガリ勉はどうすんだ？」マリウスのことだ。

「あとで説明しとく」ラファランはトイレを見まわした。掃除道具入れを見ると、へこんでいびつなアルミ製のバケツがちょうど

二つあった。ラファランはアルテュールを振り返った。「嫌なら見てるだけでもいいけど、もしスカツとしたいんなら手伝えよ」

「はあ？ 何言ってるんだお前」

「看板は五年なんだよ。五年の男子寮は一階で、あいつらは一旦寮に戻ったんだ。一階からは管理棟に行くにも、外に出るにも同じ階段を通らなきゃいけないんだよ」ラファランは腕時計を見た。「おれがトイレであいつらとすれ違ってから、まだ五分しか経ってないから待ち伏せする。もし怖いならここに残ってめそめそ泣いてる。

おれは一人でも行く」

「ふざけんな」アルテュールは青白い顔をピンク色に染めて、ラファランからバケツをぶん取った。「お前に仕返しなんかされてたまるかよ。おれが行く！ お前なんか来るな」

「勘違いするなよ」ラファランは掃除道具入れから二つ目のバケツを取り出した。「マルローのためだ」

*

ラファランとアルテュールが張り合うように、それぞれ水をたっぷり汲んだバケツを持って二階の階段の陰に隠れていると、看板たち三人がだらだらと階段を上ってきた。その場所にはラファランとアルテュール、それからアンセーニュたちしかいなかった。

緊張でこわばった顔をしているラファランとは対照的に、アルテュールはまるで他人事のようにリラックスしていた。

先頭を歩いているのはアンセーニュで、その後ろに小柄でずる賢そうな男、大柄で太った男があるいていた。一番最後に歩いている太った男が廊下の中腹に差し掛かった時、ラファランがアルテュールにしか聞こえないような小さな声で言った。「今だ！」

二人は廊下に向かって走り出した。アンセーニュたちが振り向いた時には、ラファランはバケツの中の水を太った男にぶちまけていた。その丸太のように太い足に向かってラファランがタックルする

と、男は簡単に尻もちをついて倒れた。

ラファランが顔を上げると、びしょ濡れの小柄な男が、空になったバケツを頭に被ったアンサーニユに跨るアルテュールの上着を引っ張って、殴るのを止めようとしているところだった。アルテュールは上着を脱ぎ捨てて腹を殴り続けた。

「水汲んでこい！」

そうアルテュールに言われるまで、ラファランは口をぽかんと開けてあっけに取られていた。いくらラファランでも十四歳の五年生を圧倒することは出来ないだろうと考えていたからだ。予定ではいたずらをして、こらしめてそのまま逃げるつもりでいた。

太った男が起き上がるうとしたところを踏みつけて、ラファランは自分のバケツを手にトイレへ向かった。

「こつちだ」アルテュールは手招きした。

アルテュールはバケツを受け取ると、アンサーニユに被せていたバケツを外して、鼻をつまみ、いまだに悪態をつき続けている口を目がけて水をゆっくりと注ぎはじめた。彼は苦しそうに咳をしたが、アルテュールは手を止めなかった。

二階の廊下は雨漏りでもしたかのように水浸しになっていた。

ラファランは同室の恐るべき一面を目の当たりにして、確かに驚いたものの、殴りあつた時から彼が根っからの悪人ではないと直感で感じ取っていた。

「やったな！」ラファランは黙って追い越して行つたアルテュールの背中に飛びついて言った。

「うるせー」アルテュールはラファランが全体重をかけているのも何のその、彼を振り落とそうとその場でぐるぐると回った。「いい加減下りろよ、デブ」

アルテュールから下りてめまいが収まってから、ラファランは右手を差し出した。「ラファラン・デュボワ。よろしくな」

「……アルテュール。よろしく」アルテュールは恥ずかしそうに言いながら右手を重ねた。

*

アルテュールとラファランは、二階廊下で勝利の余韻に浸っていたが、始業ベルが鳴ったことで我に返った。廊下でふざけて散々転がりまわった結果、二人の服はびしょ濡れになってしまっていたからだ。

ラファランの提案で、一度寮に戻り、服を着替えてから、次の授業が行われる理科教室に向かうことになった。

二人が教室に到着したのは、点呼が終わって授業をはじめようとしていた時だった。

「デュボワくん、ブランシャールくん」理科教師は眠たそうな声で言った。「次からは理由がどうであれ、事前に連絡をよこすように」「一体今までどこに行ってたのさ。心配してたんだよ」と、マリウスはラファランが着席するなり言った。特別な理由でもない限り席順は自由だった。

「色々あったんだ。また話すよ。おい、アルテュール。お前もこっちに来いよ」ラファランは手招きした。

ラウル ミシエルはメモを取る手を止めて、頬杖を突きながらにやけ顔で言った。「いつの間に仲良くなったことやら」

学長の呼び出し

その日の夕食後、ラファランはアルテュールを連れて、いつものようにトランプでもしようと、マリウスの部屋を訪れた。部屋にはすでにラウル ミシエルがいた。

普段参加しないマリウスも、アルテュールに指摘されてトランプと一緒にやることになった。だが彼は持ち前の頑固さで、ベッドの上でヨーロッパ史の教科書を開くことは譲らなかった。

そんな時だった。ジャン ポールが突然部屋に駆け込んできて、目を輝かせてこう言った。「聞いたか？ アンサーニユたちが学長室に呼ばれたってさ！」

ラファランとアルテュールは手を止めてお互いの顔を見た。そしてにやりと笑った。彼らが全ての責任を背負ってくれたとわかったからだ。

ラウル ミシエルだけは手を止めずに、胡散臭そうな口ぶりで行った。「何でまた？」彼は教師たちが下級生への洗礼にあえて口出ししないことを知っていたのだ。

「二階の廊下で暴れまわったんだよ！ 今あの三人と同じグループの五年が掃除してるよ。ここに来るときに見かけたんだけど、水浸しだったんだ」

廊下を挟んで向かい合った二部屋をグループとして、計四人で構成されている。班という呼び方もあるが、一年生はグループと呼んでいた。この四人で掃除当番やシャワーの順番などが組まれる。入学してから卒業するまでの八年間、部屋の割り当てと同じく、重大な問題が起きて部屋が変わりでもない限り、メンバーが変更されることはない。また、グループのうち誰か一人でも問題を起こすと、連帯責任としてグループ全員に罰則が与えられる決まりになっていた。

ジャン ポールがあまりにも大きな声で喋るものだから、いつの

間にか一年生たちが部屋のまわりに集まりはじめた。「でも、アンセーニユは何も言わないんだよ。理由も言わないし、反省の言葉も言わないんだ」

「言えるわけねーよ」アルテュールはとうとう堪え切れなくなつて嘔き出した。「おれなら死ぬな」

「何だよ」ジャン ポールは唇を尖らせた。「何があつたのか知ってるのかい？」

「知らん」アルテュールは笑いを堪えていた。「何も知らん。ラファランが証人だ」

その場にいた全員の視線がラファランに注がれた。それまで囁りつくように教科書を読んでいたマリウスでさえ彼を見ていた。

「おれだつて知らないよ」

同級生たちは落胆したため息をついた。ため息に交じつて、後からやって来た人に、なぜこの部屋の前に人だからができているのかを説明する声も聞こえてきた。

ふいに廊下が静まり返り、生徒たちはそろそろと解散しはじめた。ジャン ポールを含めた五人には何が起きているのかわからなかったが、「道を開けなさい」と年老いた男性の声が聞こえてきたため、寮監のジャン バティスト先生が来たのだとわかった。

白髪頭のとっぺんが禿げあがつた、背の高い老いた人格者は静かな声で言った。「ブランシャール、デュボワ。学長室に来なさい」その声には異論や反論を許さない響きがあつた。

「お前らまで何なんだ？」と言いたげな目で、ラウル ミシエルはベッドから立ち上がった二人を見上げた。

マリウスは心配そうにラファランの背中を見つめていたが、ジャン ポールが興味津々な様子で二人を見送っているのを見つけるなり、恐ろしい顔つきで情報屋をきつと睨みつけた。

先に部屋を出て行ったのはラファランだった。ラファランの頭はジャン バティスト先生の肩とほとんど同じ高さだった。アルテュールは何も言わなかったが、部屋を出る直前に振り返って、ほとん

ど聞こえない大きさの声で、「多分それだ」と言いながらマリウスを、ヨーロツパ史の教科書を指差した。

*

ラファランとアルテュールは到着するまで、ジャン バティスト 先生も一緒にいるということで、一言も喋らなかった。ラファランは二階廊下の件を、アンセーニユがとうとうプライドを捨てて打ち明けてしまったのだと思った。

学長室は管理棟一階にあった。ドアはすりガラスの窓がついており、ほとんどぼやけているものの中の様子を見ることが出来た。あまり広い部屋ではなく、寮の部屋とそう変わらないように思えた。

入ってすぐの大きな窓からは校門が見えたが、日が暮れているため、街頭の黄色い光が暗闇に突然浮かんでいるだけだった。部屋の中央にはデスクがあり、ファイルがいくつも積み上げられている。きっと各教科の担当教師や寮監などから渡された報告書が入っているに違いない。壁にはそれなりに値の張りそうな風景画が掛けられていた。入って左手の壁に沿ってソファが三脚置いてあり、そこにラファランたちのヨーロツパ史を担当しているジュリアン先生が腰かけていた。まだ大学を出たばかりで若いにも関わらず、石頭な上に陰険な男として生徒たちから嫌われていた。濡れているものの髪にはきちんと櫛が通っており、暖かそうなローブの下からは上質な生地 of 寝間着が覗いている。

学長の姿はどこにもなかった。

「連れてきました」ジャン バティスト先生が言った。

「はい。どうも」ジュリアン先生はぶっきらぼうに言った。

ラファランはいたずらっぽい笑顔を浮かべて、議題が看板ではないことを祝うように、背中アルテュールと手を握り合った。

二人の後ろではきはきとした女性の声がした。「遅れてすみません」学長だった。

彼女はジュリアン先生とは違って、まだ入浴は済ませておらず、赤毛の髪はまだ頭頂部できつく結ばれていた。小柄だが見かけによらず、その小さな体はエネルギーに満ちている。

学長はデスクに腰を下ろした。そしてラファランとアルテュールの二人をそれぞれ見て、ジャン バティスト先生を見上げた。「それで、何があつたんですか？」

「私から話させてください」ジュリアン先生が右手を挙げた。

「ジュリアン、私が呼んだのは寮監である彼と、この二人だけです」

「ですが」「ジュリアン先生は勢い余つて腰を浮かせた。

「私はいじめの仲裁をするつもりはありません」学長はきつぱりと言った。そしてジュリアン先生を見て諭すように言った。「話は後で聞きます。今はこの三人とで話がしたいのです」

「出ていけということですか？」

「そう聞こえませんでしたか？」学長はジュリアン先生が部屋から出て行ったのを確認してから言った。「さて、なぜ彼をラテン語資料室に閉じ込めたりしたのか、話を聞かせてもらいましょう」

ラファランとアルテュールはお互いを小突きあつたりしていた手をぴたりと止めた。

二人はなかなか口を開こうとしなかったが、とうとうアルテュールが呟いた。「理由なんてねーよ」

「ブランシャール、私の前ではもう少しきれいな言葉を使いなさい。もう一度」

「理由はありません」アルテュールは乱暴な口ぶりだった。

「ジュリアン先生が気に入らなかつただけです」ラファランが言った。

「どのように気に入らなかつたのですか？」

「それは」「ラファランは口をつぐんだ。

「あなたたちは特に理由もなく、教師をラテン語資料室に閉じ込めるのですか？」学長は決して怒らなかつた。

「閉じ込めてはいけないんですか？」アルテュールが言った。彼は敬意を払うとかいう言葉を知らないように思えた。

「例えばあなたが道を歩いていたらとして、突然刺されたとしても文句を言わないのなら、閉じ込めても問題はないでしょうね」

アルテュールは返事をする代わりに、手触りの良さそうな短毛の絨毯に唾を吐いた。ラファランは隣の同級生の行動に目を丸くさせた。

「ブランシャール」とジャン バティスト先生は低い声で咎めるような口調で言った。アルテュールはそっぽを向いてしまった。

ラファランは誰か親しくもない他人に心臓をゆつくりと握られるような、ざわついた感覚を覚えた。不穏な空気を醸し出しているのは、他でもないアルテュール・ブランシャールだ。

学長は深いため息をついた。「反省の色が見られないのなら仕方ありません。反省作文五ページと、一か月の食堂掃除を言い渡します」

ジャン バティスト先生は学長の視線に答えるかのように頷いて口の中で「わかりました」と言った。

二人の男子生徒が寮監に連れられて部屋を出ていこうとするのを、学長ははつきりとした発音で呼び止めた。「ブランシャール、出ていくのは吐いたものを片付けてからです」学長はアルテュールと一緒に振り返ったベテラン教師と一年生を見た。「あなたたちは帰ってよろしい」

スコットランドから来た男

「それで、学長がこう言ったんだ。『私の前では丁寧な言葉を使いなさい』ってな」アルテュールは英語教室の椅子にもたれかかりながら、アウトローになりたいと思いつつ、度胸が無いため決まらなかった。正確には何て言ってたか忘れたけど、とにかくこんな感じの言葉だったな。それで、おれは唾を吐いた」

何で？ どうして？ とギャラリーが質問する。アルテュールはそれらを芝居じみた動きでなだめてから、優越感に浸った表情でゆっくりと口を開いた。

「きれいな絨毯だったぜ。ペルシャかカシミアだ。それともはアンゴラかもな。理由なんてねえよ。ただうざかっただけだ」

学長室に呼ばれたというたったそれだけでも、小便をちびっつてしまっほどのギャラリーたちは、きつと妄想したことだろう。学長室に呼ばれ、学長に尋問されている最中で、おそらく彼女のお気に入り

の絨毯に唾を吐く自分の姿を。
しかし、アルテュールは最後の最後で呼び止められ、自ら吐き出した唾を掃除させられたという場面については一切触れなかった。そんなエピソードがあつては英雄といえないからだ。

「ラファランもその場にいたんだろ？ お前の話も聞かせてくれよ」ギャラリーの一人が言った。

ラファランはアルテュールの隣の席に座って、マリウスとノートで陣取りゲームをしているところだった。ラウル ミシエルは英語の単語帳を片手に観戦していた。

「忘れた」ラファランは振り返ることなく答えた。

「つまんねえ奴」そう言って、彼は再びアルテュールの話に耳を傾けはじめた。

陣取りゲームではマリウスが一枚上手だったが、あと三手で確実にラファランを降参させられるにも関わらず、彼はあえてをしなかった。

「マリウス、なぶり殺しなんて趣味が悪いなあ」ラウル ミシエルはいまやほとんど単語帳を見ていなかった。

「殺せ。いつそ一思いに殺してくれ」ラファランはほとんど無効と思われる陣地に自分のマークを書きながら言った。

「うん。でも……ラファランはまだ初心者だから」マリウスは腕を組んで考える振りをしながら言った。

「情けなんかいるかよ」マリウスが次の手を考えている間、ラファランは右手で鉛筆をくるくると回して待っていた。九月の時点で、一年生の中でそれが出るのはごく僅かしかいなかったが、二か月経った今ではラファランがコツを教えるまでもなく、約半分の男子生徒がそれができるようになっていた。ちなみに女子生徒たちの間ではあまり流行しなかった。

「ねえ、デュボワくん」ふいに女子生徒の声が聞こえてきた。「先生を閉じ込めたって聞いたけど……」彼女は黒髪を二つに縛って、それぞれに青いリボンをつけていた。

ラファランは彼女のそのリボンに見覚えがあった。「ええっと、ソランジュ・リサジュー？」

「正解」リサジューは恥ずかしそうに笑った。「学長室に呼ばれたって本当？」

ああ、その話かというようにラファランは顔をしかめた。「本当だよ。あそこの馬鹿が言ってるし」と彼は英雄ムツシュ・アルテュールを顎で指した。

「叱られた？ 罰則とかあるの？」

よく質問する子だねとラウル ミシエルとマリウスが顔を見合わせた。

「食堂掃除がなんちゃらと、作文だったかな。あんま覚えてないけど」

「大変　ごめんなさい。私のせいでしょ？」リサジューは胸に手を当てて、今にも泣きだしそうな顔でラファランを見た。

「うぬばれんな」

そう言つて、ラファランは怪我や風邪を引いたときに、母親がそうしてくれたようにリサジューの髪を撫でた。二、三回撫でられてから、彼女はラファランの手を振り払うように顔を上げると、走つて女子のグループへと走り去ってしまった。

*

「この間のレポートでA+だったのは一人だけだったわ。ねえ、教え方が悪かったとでも？」とエマ先生はややイギリス語訛りのあるフランス語で、苦笑いしながら言つた。

「ソルシエールつてば、えこひいきしたんじゃないのー？」女子生徒の一人が冗談交じりに言つた。

「私があなただったらしたかもね」

彼女はジュリアン先生とは違い、生徒たちから慕われていた。その高い鷹鼻から付いたあだ名は「ソルシエール（魔女）」だったが、彼女は本名であるエマと呼ばれるよりも、ソルシエールと呼ばれるのを望んでいた。

「マリウス・ハルフォール」ソルシエールはマリウスの机の上にレポートを返却した。評価はA+。「よくやったわね」

彼の近くに座つていた生徒たちがほとんど文法的なミスの見られない、それでいて主題を見失うことなく意見を述べている、細かい文字でびっしりと書かれたマリウスのレポートを覗き込んだ。

続いてレポートを受け取つたのはラウル　ミシエルだった。彼は自分のレポートを見て首を横に振つた。「他の教科ならなんとかなるんだけど、英語となると手も足も出なくなるんだよな」

「お前島民なんじゃねえの？」後ろに座っていたアルテュールが、マリウスの座席を下から蹴り上げた。フランスにはコルシカ島とい

う島があるが、彼はイギリスを指しているのだろう。

マリウスは振り返って、むっとした顔で言った。「スコッチだけ何か?」

「だからお前そんなにチビでガリガリなのか。この国のもんを食わなきゃダメだろ」アルテュールが言った。

「やっぱイギリスか!」そう言ったのはラファランだった。「はじめて会った時に、なんだかスコーンっぽいなって思ったんだよ」

「イギリスじゃない。スコットランド」マリウスは唇を尖らせた。

そしてラファランを見て言った。「今スコーンって言った? 生き物ですらないの?」

「でもさ、マリウス」ラウル ミシエルが慰めるように肩に手をやった。「スコーンになる前は卵だって生き物じゃないか」

「あれって卵使うのか?」アルテュールが聞いた。戻って来たばかりのレポートには目もくれない。

ラウル ミシエルは首を横に振った。「知らない」

三人の視線が、おそらくスコーンの作り方を知っているであろうマリウスに注がれた。

「知らないってば。食べたことはあるけど、作ったことなんかないんだから」

「でも英語は喋れるんだろ?」ラファランは興味津々といった表情でマリウスを見ていた。

マリウスははっとしてラファランから視線を逸らした。「おじいちゃんとおばあちゃん英語しか喋れないから、二人と話すときには英語を喋らなきゃいけなかっただけで……だからその、形式張った文章は多分読めないと思う」

ラウル ミシエルは頬杖を突きながらにんまりと笑った。「イギリスっていったら ごめん、スコットランドだった? ビートルズだよ。今世界中で人気じゃないか」ビートルズという部分だけ彼は英語っぽく言った。

「ビートルズ?」アルテュールは鼻で笑った。「なんだそりゃ」

「知らないの？ 兄さんが熱中してるんだ。イギリスのバンドでねえ、マリウス、何か歌えないの？」

「歌う？ 無理だよ。おじいちゃんがいつも口ずさんでる歌ぐらいしか知らないんだ」

ラファランがマリウスに向かって、ぎこちなくウインクした。「今度音楽室に行ったらギターでも弾いてみるよ」

「そんな……」

「それ以前に指が届くのか？」

アルテュールがちゃかしたことに對して、マリウスはふんと鼻を鳴らした。「わかったよ。やればいいんでしょ？」

スコットランドから来た男（後書き）

クリアファイル整理してたら、約一年前に書いた設定集という名の走り書きが出てきました。例えば、ラファラン・エヴラール・レナルド・デュボワとか。といってもラファランのフルネームとか絶対に作中に出てこないです。

（なんでもフランスの方は親のミドルネームでさえ、冠婚葬祭時に初めて耳にするのも珍しくないとか）

主要メンバーの顔立ちやは俳優とかにモデルがいるけど、紹介するとキモくなるのでお口にチャックしておきます。

ダルタニヤン

食堂の掃除は、夕食を終えてから消灯時間の十時までの間に行われることになっている。罰則の掃除には食堂の他にシャワー室、トイレ、廊下、各教室などがあつた。

食事の時とは違い、人もラファランとアルテュールを含めて四人しかいなかったし、テーブルや椅子などは全て食堂の隅に追いやられていたため、別の部屋にいるようだった。普段食事の受け取りをする厨房との窓には、アルミ製の板がはめられていた。厨房の掃除は区の清掃員あるいは調理師の仕事のようだ。

ラファランは濡れたモップで、誰がこぼしたのかわからないヨーグルトラしきかたまりを擦りながら、昨日までほとんど毎日欠かすことなく行われていた、マリウスの部屋でのトランプ大会に思いを馳せていた。

アルテュールはテーブルと椅子の拭き掃除をしていた。濡れた雑巾でテーブルをなぞるだけで、あまり丁寧に仕事をしていない。

「あんた、ちゃんとやりなつてば」ブロンドのボブカットの上級生が言った。化粧が濃いせいか、それとも目つきが悪いせいか、罰則の常連といった印象を受けた。

「はい」アルテュールは気のない返事をした。ラファランは彼の短気すぎる性格が、いつか大きな問題を引き起こしてしまうのではないかと心配していた。

ラファランは呼び出しを受けた日の就寝前や、授業中などの時間を使って、反省作文をほとんど書き上げてしまっていた。あとはまとめである最後の一段落の書き出しが思い浮かばないだけだった。アルテュールはというと、まだ名前とタイトルしか書いていないと言っていた。反省作文を書く意味が分からないというのだ。書かなければ罰則が増えることは目に見えているのに、彼は自分の身勝手さで自分の首を絞めている。

アルテュールが週に一度妹に宛てて手紙を書いていることをラファランは知っていた。妹が一人と、美人な母親がいる、というのがアルテュールの家族について知っている全てだった。彼はとてもすらすたと妹への手紙を書いていた。だから、反省作文もそういう風に書けばすぐに書き終わるはずだと言うと、アルテュールは青白い顔を、ピンクを通り越して真っ赤にさせて、それとこれとはわけが違うと怒鳴った。何が彼をそこまで怒らせてしまったのかラファランにはわからなかったが、それ以来妹の話は一切出さないことにした。

ラファランがやっとヨーグルトをこそぎ落とした時、食堂の出入り口にラウル ミシエルが立っていることに気付いた。八時半という時間帯や、ノートと筆箱を持っているところから、週に一度行われる学年代表だけの集会、代表会の帰りだとわかった。

「ブランシャールいる？」ラウル ミシエルは小さな声で聞いた。

ボブカットの上級生が彼を振り返った。「何の用？」

「アルテュール・ブランシャールを呼びに来ただけだ」我らが学年代表ははつきりとした声で言った。

「誰だつて？」

「テーブル拭いてる奴だよ」ラファランが窓際で雑巾と遊んでいる同級生を指差した。

「ああ、あのバカか。それで？」

「寮監が呼んでるんだ」ラウル ミシエルは学年代表の腕章がよく見えるように、ノートを少し横にずらして左腕の前に突き出した。

「ジャン バティスト先生が」

「テーブル拭き！」ブロンドが怒鳴った。「こつち来な。寮監が呼んでるつてさ」

そう言われると、アルテュールは顔を明るくして雑巾を放り投げると、浮かれた足取りでやって来た。食堂を出ていく際にラファランの背中を二度叩いて行った。翻訳すると、お先に失礼、だろう。「間違えるなよ。寮監室だからな。三階だぞ」アルテュールが廊下

をまっすぐ行こうとしたため、ラウル ミシエルが呼び止めた。

「また何かしたのか？」アルテュールが見えなくなり、ブロンドの上級生も元の仕事場に戻ったのを見計らって、ラファランが聞いた。「そのセリフをお前が言うかね」ラウル ミシエルは笑った。「フイリップの本を隠したからだと思う」

「お前と同室の根暗デブか」ラファランは掃除をさぼっていると思われないように、モップも動かしていた。ただし同じところを何十回もこすっている。「本がなくなったただけでチクるとは流石だな」
「それでジャン バティスト警部によるさまざまな聞き込み調査の結果、犯人が見つかったってわけさ」

「じーさんも大変だな」

「だな」ラウル ミシエルは何かを言おうとして口を開きかけたが、口を閉じた。そして少ししてから言った。「そっぴやアンサー ニュがお前たちを殺してやるって息巻いてるってさ。噂っていうか兄さんから聞いたんだけど。『すかつとしたけど、やって良いことと悪いことがある』って言ってた。それで、一体何やかしたんだ？」

ラファランは周囲を確認してから囁くように言った。「復讐しただけさ」

「まあ、お前が好奇心で悪さをするような奴じゃないってことくらいわかってるから、心配してないけどな」ラウル ミシエルは腕時計を見た。「じゃあ、そろそろ帰るよ。しっかり掃除してくれたまえ」

「はっ、一切の抜き取りありません」ラファランは敬礼して、笑顔で友人を見送った。

アルテュールが戻ってくる頃には、ラファランは床にこびりついた食べ物全て落としていた。柄を握っていた手に力を込めすぎたせいか、両手がじんじんと痛んだがまだ作業は残っていた。

「どうだった？」アルテュールが食堂に入るなりラファランが聞いた。

「掃除が二週間伸びた。もう知らん」アルテュールは出ていく前に投げ捨てた雑巾を蹴り飛ばした。それブロンドの上級生の足元に落ちた。「ラファラン、次お前だぞ。学長室だ」

ラファランは手を止めた。「学長室？ 冗談だろ」

「本当だよ。じーさんが言ったんだ」アルテュールはそう言つと、ラファランの手からモップをぶん取った。

ラファランには考えを巡らせてみたが学長室に呼ばれる理由が見つからなかった。ジュリアン先生をラテン語資料室に押し込んだのを最後に、彼は何もしていなかったからだ。

「行つてらっしゃい」と嬉しそうに言つと、アルテュールはラファランの背中を軽く叩いて、廊下へと押し出した。

*

学長室のドアをノックすると、中から「どうぞ」と学長の声が聞こえてきた。

今晩は昨晩とは違い、学長ははじめからデスクに着いていた。銀縁の老眼鏡をかけている。ラファランが小学生の時に算数を教えてくれた男性教諭が、老眼鏡をかけていたからすぐにわかった。デスクにはファイルが一つだけ出ているだけで、書類は角にまとめられていた。

「そんな出入り口に立つてないで、こっちへいらっしゃい。ソファに座つても良いわよ」

ラファランはジュリアン先生が腰かけていたソファを見た。座り心地は良さそうだが、座つたら昨晩の先生のようにみじめに見えるのではないかと思い、デスクの前に立つことにした。

「夕食前にリサジューという女子生徒がやって来て、事情を全て話してくれました」学長は嬉しそうな声で言った。

リサジューという名前を耳にするなり、ラファランは体のどこかが痛むのか顔をしかめた。

「私はあなたのような生徒が嫌いではありませんよ」彼女はデスクの上で手を組んだ。「授業中にラブレターに添える詩を書くのは感心しませんが、それを見つけ、授業中に読み上げたジュリアン先生に腹を立てたから、あなたは彼を資料室に閉じ込めたのですね？」
ラファランは反論しようと顔を上げた。顔は真っ赤に染まっていた。「昨日言った通り、それは、それには、そもそも、特に理由なんてないんです……アルテュールの言った通り、ぼくは、ただ先生が気に入らなかっただけで……」

「あなたがそう思っているのならそうしましょう」学長はにっこりと笑った。「ですが、私はリサジューの話も信じます。ただし、罰則は罰則ですからね」

ラファランはもう何も言い返せなかった。リサジューが泣き出し、ても尚、詩を読み続けたジュリアン先生に腹を立てたことは事実だからだ。現に彼女と学長はラファランがなぜ閉じ込めたのか知ってしまった。しかし、ラファランはダルタニャンと呼ばれたくて行動を起こしたわけではない。結果としてリサジューの敵討ちをしたことになってしまったが、ジュリアン先生を呼び出して閉じ込めることを計画し、それを実際に実行した時は、彼女のことなんて全く考えていなかったからだ。

学長室を出てしばらく廊下を歩いたが、紅潮した頬はなかなか元に戻らなかった。

音楽室

その日は珍しく朝から晴れていた。

ラファランは目覚まし時計に七時ちょうどに起こされると、隣のベッドで背中を向けて眠っているアルテュールを揺さぶった。なかなか起きようとはしなかったが、掛け布団を引っぺがすと、彼はすぐに起き上がったて不機嫌な顔を向けてきた。

「お前が起こせて言ったんだろ？」とラファランは自分のクロ―ゼットを開いた。

「いま何時？」アルテュールは布団に手をかけて、また眠りにつくうとしていた。

「七時半」ラファランは嘘をついた。

「まじで？」そう言ってアルテュールは飛び起きて、ラファランの枕元に置いてある目ざまし時計を見た。「まだ七時じゃん。嘘ついでんじゃねえよ」

「早く着替えて食堂に行かないと、いいボールが取られるぞ」

「ああ、そうだった。それを早く言えつての」

アルテュールはトランクから下着を取り出すと、ラファランの目もお構いなしで着替えはじめた。彼は入浴は夜しなければいけない、という学校の規則に不満を言う生徒の一人だった。それとは関係なしに、水を嫌っているような素振りさえ見せる。

言いそびれたが、アンナ・ヴェシエール学園は制服着用が義務付けられている。ラファランはもう目をつぶって鼻歌を歌いながらも、左右対称で完璧に結べるようになった。ネクタイを結びながら、洗濯室から返ってきたジャケットを、アルテュールがクロ―ゼットから取り出してベッドに放り投げるのを見た。

「今日もマリウスのとこに寄るのか？」シャツの袖ボタンを留めながらアルテュールが聞いた。

「やめとくよ」

昨朝部屋を訪ねたところ、たたき起こされましたという文字を、顔に大きく書いたマリウスが出てきたのを思い出しながら、ラファランは首を振った。

ルームメイトと行動するようになってから、ラファランはそれまで体の中から湧き出していた外への欲求を抑えることをやめて、朝と昼休みと授業後など、時間さえあればグラウンドに出て体を動かすようになった。罰則を受けたせいで、週末の外出が禁止されたというのも、おそらく要因の一つに違いない。だが、それによってラファランはマリウスとのこれまでの友好的な関係を壊すことはしなかった。彼とは今まで以上に良き友人として接した。しかし、当のマリウスは、ラファランと話すことでアルテュールが気分を損ねることを知っていたため、ラファランと話すときはいつも眉間にしわを寄せていた。ラファランはそれに気づかない振りをしていたが、内心はマリウスに嫌われているのではないかと考えていた。

その日の音楽の授業で、放課後は音楽室が解放されていることを知ったラファランは、アルテュール、マリウス、ラウル ミシエルたちに、音楽室に集まろうと提案した。マリウスの英語の歌に興味があったし、彼と仲直りできる最後のチャンスだと考えたからだ。三人は二つ返事で快諾した。特にアルテュールは乗り気だった。彼が何か悪だくみをしているということは、教えられなくてもわかった。

音楽室の壁には、防音のために小さな穴が等間隔に開けられたベニヤのパネルがはめ込まれてあった。床はローマのコロッセオのようにひな壇のようになっている。左右の壁にはシヨパン、ベートーベン、モーツァルトといった有名な作曲家たちの顔写真と名前が記載されたポスターが、ざっと見て十人以上は貼ってあった。三人が座ることのできる長机や長椅子は、使い古されてニスが剥げていた。約束していた四時になっても、マリウスはやってこなかった。音楽室には本来教師の許可を得なければ、生徒だけで入ってはいけな

いことになっているため、ラウル ミシエルはラファランが許可を得ていないことを知るなり、急にびくびくしだした。ひよつとしたら例の兄さんから掃除よりも厳しい罰則についての話を聞いたのかもしれない。

ラファランはギターを探したが見つからなかった。どうやら隣接している準備室にあるらしかったが、ドアには鍵がかけられていた。音楽室にはトランペットやトロンボーン、ヴァイオリンなどといった高価なものが多いからだ。アルテュールは真っ先に、ひな壇の頂上の隅に固めて置かれている打楽器のところへ行き、かけてあった毛布を剥ぎ取って、木琴やティンパニを叩きはじめた。音楽室にボオンと低い音が響いた。

「遅れちゃってごめんね」と、マリウスは息を切らして音楽室にやって来た。「カトリーヌ先生と話してたんだ」

アルテュールはマリウスに気付かなかった振りをして、今度はウインドチャイムを鳴らした。ピアノの陰から顔を出したラウル ミシエルはほっとした表情でマリウスを見た。きっとマリウスが教師か上級生かもしれないと驚いて、とっさにそこへ隠れたに違いない。「なんだ、君だったのか」ラウル ミシエルはそう言ってマリウスの肩を叩いた。

「最近カトリーヌ先生とよく話してるよな」ラファランが言った。

「うん、ちょっとあってね」マリウスはアルテュールから顔をそむけて早口に言った。

「でも、国語の成績は良いはずだろ？」ラウル ミシエルが言った。

マリウスは色素の薄い眉をひそめて、言いにくそうに言った。「奨学金の話をしてたんだ」

「ああ、なるほど」

ラファランは入学式の朝、マリウスのトランクケースが古すぎるあまり破れてしまったことを思い出した。寝る間も惜しんで倒れるほど勉強に打ち込むのも、その奨学金とやらを得るためなのだろうか。この世の全てが金で成り立っていると思いきらされて、なんだ

か気分が悪くなるった。

「お前大丈夫なのか？」

「うん、まあ、そこそこね」

マリウスは人を寄せ付けたがらないような、諦めまじりの作り笑顔を浮かべた。二人はもうそれっきり質問はしなかった。

結局準備室に入る鍵を開けることができず、四人は音楽室の机に腰かけて、おしゃべりをして時間を潰すことにした。アルテュールは落ち着きがなく、すぐに机から離れて、音楽室の中にある興味深い楽器、音楽家たちの肖像画、それからこの四階の窓から見える遠くの風景を眺めたりした。

ラファランはマリウスを笑わせようと、ジョークやギャグを考えて、次から次へと披露した。しかしマリウスはそれよりも、教科書やノートといった勉強道具を持ってここに来なかったことを気にかけていて、あまり笑ってはくれなかった。

「お前って本当つまんねえ奴だな」と、ラファランの何度目かのジョークが不発に終わった後に、アルテュールが言った。「生きてて楽しいか？」

「アルト、そんなこと言うな」ラファランはアルテュールを叱った。「マリウス、気にするなよ」

アルテュールは何ごともなかったかのようにまた窓の外に顔を向けた。マリウスは庇ってもらったことが癪に障ったのか、あるいは本当に嫌いになってしまったのか、不明瞭な返事しかなかった。

ラウル ミシエルが咳払いをして、不穏になりつつある空気を換えようと試みた。

「見るよ、メリーゴーラウンドが組み立てられてる」アルテュールが言った。彼は一キロほど離れた空き地を指差していた。

「ぽつんとしか見えない……目が良いんだな」アルテュールの隣に立って、ラウル ミシエルが言った。

「収穫祭か何かな。定期的に」マリウスは椅子から立ち上がろうとしなかった。

「アルト、あんまり乗り出さない方がいいんじゃないか？」とラファラン。

「故郷の村じゃ、花祭りの時にメリーゴーラウンドが来るんだ」

「花祭り？」ラウル ミシエルが訊ねた。

「六月にやってんだよ」アルテュールは窓枠に危なっかしく腰かけた。

「アルテュール、下りろよ」

ラファランは窓の下を覗き込んだ。二階にコンクリートのベランダがあるだけで、落ちたら骨折、打ち所が悪ければ死ぬかもしれない。

「もしかしてナント？ だったら昔言ったことがあるよ」ラウル ミシエルが言った。

「ほんとか？ じゃあ会ったことあるかもな」

アルテュールは嬉しそうに笑った。くすんだブロンドの髪が夕日に当たってきらきらと輝いていた。彼はラファランの忠告を無視して、床につかない足をぶらぶらと前後に揺らしていたが、ある時、ほんの一瞬気を抜いた拍子に手が滑り、背中から落下した。

ラファランは咄嗟に窓に足を掛けて、親友を救おうと飛び出した。気のせいかもしれないが、落下していくアルテュールはどこか楽しそうだった。しかし、ラファランが飛び出てきたことに気付くと、端正な顔は引きつり、一気に後悔という文字が顔を覆った。

ラウル ミシエルだけでなく、マリウスまでもへそがさんに付くほど身乗り出して、落下していく二人を覗き込んだ。コンクリートに二人の体が打ち付けられたのを見て、ラウル ミシエルは音楽室を飛び出した。

*

目を覚ますとラファランは医務室のベッドの上に横たわっていた。消毒と古くかび臭い木材が混ざった臭いが鼻についた。状況を確認

しようと頭を左右に動かすと、右隣のベッドの上で、アルテュールが反省作文を書いていた。あれほど書くのを拒み、提出しない分だけ掃除期間が増えようと、頑として書こうとしなかった反省作文をだ。彼はほとんど無傷なように思えた。強いていうと、頬に傷テープを貼っている程度だ。

一方ラファランはというと、左腕の肘から先が固まったような感覚だった。事実、骨折した腕は石膏で固められていた。頭が重く、右手で触れてみると、鉢巻をするように包帯が巻かれていた。そこでやっと、彼は窓から落下するアルテュールを助けるために、窓から飛び出したことを思い出した。

ふいにアルテュールが作文を書く手を止めて振り返った。そして、ほっとした表情を浮かべた。

「おばちゃん！ ラファランが起きたよ」

奥の部屋からおばちゃんもといおばあさん、改め校医が顔を出した。白髪ともブロンドともつかない髪を束ねている。

「あんまり大きな声を出すんじゃないよ」と彼女は言った。年を取ってはいるものはつらつとした声だった。

アルテュールは校医を目で追ってはいるものの、ラファランと目を合わせたがらなかった。

「どこか痛むところはないかい？」

校医のおばあさんは、石膏で固まったラファランの腕を持ち上げたりしながら、優しい口調で訊ねた。その間アルテュールは校医の脇から顔を出して、不安そうな顔をして腕を見つめていた。

「どこも。大丈夫です」

「治る？ なあ、治るのか？」アルテュールが言った。まだ目を合わせようとはしなかった。

「あんたはうるさいね。作文でも書いてな」そうきつく言うと、彼女はラファランに向き直った。「そうか。ならよかった。今すぐにも病院に行って検査できるね」

「どのくらい眠ってたんですか？」ラファランは恐る恐る訊ねた。

「ほんの二、三時間だよ」

壁掛け時計は七時を指していた。

「ご両親に電話しといたからね。お母さんがひどく心配してらしたって言うてたよ。あんたね、親に心配かけるもんじゃないよ」

ラファランは受話器を片手に取り乱す母親の姿を、いとも簡単に想像することが出来た。それを横目に嘲笑うような顔でコーヒーを飲む伯母と、横柄な態度でジダンを吸う伯父の姿も。時間帯からいって父親はまだ帰宅してないだろう。

「病院って、大げさじゃないですか？」

「何言ってるんだい。あんた頭打つたんだよ。覚えてないのかい？」

ラファランは答えなかった。彼女は浅くため息をついた。「後から何かあっちゃ大変だからね。大事を取って、検査を受けるんだよ」

そう言うのと、校医は医務室を出て行った。車を手配するのか、寮監に連絡を入れるのか、おそらくその両方だ。

ラファランはベッドに横たわっていた。そのままでは両親に対する謝罪や、きつとされるだろう寮監からの説教、友人たちへの言葉など、考えなければいけないことが山ほど頭の中から出てくるため、天井のしみを数えることでそれらを無視することにした。

いつの間にかアルテュールがラファランのベッド脇に立っていた。

「大丈夫か？」

普段のような自信に満ちた悪がきの顔ではなく、ずぶ濡れでしょぼくれて縮んだ子猫のような顔をしていた。生まれてから初めて罪悪感というものを知ったというような顔だ。

「まあね。お前は怪我しなかったのか？」

アルテュールは頬の傷テープに触れて、はがそうと爪でテープの端をひっかいたが、二ミリほどはがしたところでまた指を押し付けて元に戻した。

「昔から頑丈なんだ。なあ、その、怒ってない？」

「怒ってる」ラファランはいたずらっぽく笑った。

「なあ、まじめな話なんだよ。おれ反省してるんだ。本当ごめん。」

反省してる。馬鹿だったよ」

ラファランはまるで自分が父親か教師にでもなったような気分だった。彼は黙って右手を差し出した。

「お前だけが悪いわけじゃないよ。おれだって飛び出した　握手したら、お互いに帳消しにしよう」

アルテュールはそろそろと右手を重ねた。彼の手はとてもひんやりとしていた。

音楽室（後書き）

結構前に書いたんですが、学生時代にはちよつときりが悪いかなと思つて、考えるのをやめたまま放置してました。
一応ここで4ばかの学生時代は終わりです。

クリストフ・ブランシャール（前書き）

行き過ぎた体罰の描写があります。

クリストフ・ブランシャール

十一月のラパール村の花壇は、次の春に美しい花を咲かせるために、休暇期間の真ただ中だった。

クリストフ・ブランシャールは自宅の玄関先の石階段に腰を下ろして、通りを歩く人びとをぼんやりと眺めていた。身長は九歳の子供としては平均並みだったが、随分と華奢な体つきをしていて、くすんだブロンドの髪はぱさついていた。深いグリーンの瞳には常に不安の色が浮かんでいて、そのせいで学校では避けられていたが、ブランシャールという名前が、彼をあからさまないじめから守ってくれていた。

かつてサングヌーブに立ち並ぶどの邸宅からも、村で最も美しく広大な花畑が一望できたものだったが、今では邸宅と花畑とを隔てるようにアパートメントや小学校、集会所などが立ち並んでいた。特権的な権力も、時代の流れと共に廃れていったのだった。

「こんにちは」

郵便配達員の若い男が自転車に跨りながら挨拶した。彼がこの村に住む混血の女性と結婚して、半年前に移り住んできたということ、この小さな村に住む誰もが知っていた。

クリストフは返事をしなかった。黙ったまま顔を背けて、老人のように一度頷いただけだった。母エリーズの教えで、この村に住む人々が、サングヌーブに住む純潔なバンパイアを敬うのは当然の行為だと思い込んでいたからだ。

郵便配達員は顔をしかめたものの、黙って郵便ポストに手紙を二通押し込むと、何も言わずに自転車を走らせた。

クリストフは郵便配達員の姿が見えなくなってから、おもむろに立ち上がって、届けられたばかりの手紙を取り出した。一通は父ロベールに宛てられた差出人不明の赤い封筒で、もう一通は妹アレックト宛ての手紙だった。差出人はパリの学校に通っている兄アルテュ

ールだということは、確認しなくてもわかった。

クリストフは盗みに入るように玄関扉をそつと開け、極力音を立てないように歩いた。父宛ての封筒をリビングのコーヒートーブルの上に置くと、階段を上り、妹の部屋へ向かった。ここ一か月ほどロベールと顔を合わせた記憶がなかった。彼は子供たちがエコールへ行ってから目を覚まし、夕食の前に出かけてしまっただ。

アルテュールが家を出てから、エリーズはますますクリストフにきびしく当たるようになった。そのため彼は子供部屋以外では声も出してはいけなほど恐怖におびえていた。エリーズは父親のクローゼットから使い古されたベルトを持ち出して、ことあるごとにそれで息子を打った。服に隠れた細い体にみみずばれができ、表面の薄い皮は叩きすぎるあまり剥がれた。本来ならばエコールの教師に虐待を疑われるところだが、彼女は自分たちの治癒力が異常なまでに高いことを知っていた。寝る前に叩けば、寝ている間に跡形もなく完治してしまうため、誰もこの由緒正しいお屋敷で虐待が行われていることに気づかなかった。

「アレット、入るよ」

クリストフは妹の部屋をノックして、五センチほどドアを開けてそこから顔を出して言った。女性の部屋を覗いてはいけないと心得ているため、目は手で覆っていた。

「いいよ」

アレットはベッドの下から、クリストフのお下がりの本を取り出してしていると笑った。

「ああ、それ。読んでるんだね」クリストフは表紙をちらりと見て、嬉しそうにほほ笑んで言った。

「ついさっきまで読んでたの。でも、ノックしたのがお母さまかと思っただけ」

エリーズの癪癪は妹の持ち物まで及んでいた。彼女の言葉から察するに、クリストフの本を彼女は読んではいけならしい。彼は右側頭部のやや上にできている、小さな円形ハゲが妹に見つからない

ように髪を撫でつけた。

「さつき、手紙が届いたんだ」

そう言うと、アレットは顔をぱつと明るくさせて、本をベッドに放り出して立ち上がった。わくわくして今か今かと手紙を待っている彼女を見て、もう少し楽園での生活を堪能してから言つべきだったと後悔した。

「ねえ、クリストフったら。いじわるしないで早く見せて」

クリストフの頭に、兄と妹が出発の間際にこの部屋でキスしていた光景が浮かんできた。あのろくでなしのことだから、彼女の事もただの暇つぶしか何かとしか思っていないに違いない。

「アレット」クリストフは興奮して震える声で言った。

「なあに？」

「アルテュールはお前が思つてるような奴じゃないよ」

「クリストフったらアルテュールに嫉妬してるんだわ」アレットは下唇を噛みしめていた。「お兄さまが人気者だからって」

「人気者だって？ 君は勘違いしてる。あいつは乱暴者さ。この村が生み出した犯罪者の一人だ。今に見ている。きつと何か大きな問題を起こすに決まつてる。ねえ、アレット。君たちは兄妹なんだよ。いい加減目を覚ましたら？ お姫様みたいな生活をしている君には無理な相談かもしれないけど、何か間違いが起きてからじゃ遅いんだよ。あいつがだめでも、きみなら目を覚ますことができるはずだよ。」

アレットは薄いグレーの目を見開いて、涙をためてクリストフを睨みあげていた。きれいな花畑を愚かな猟犬に踏み荒らされて、たいそうご立腹だった。ベッドに座った拍子に猟犬の骨、兄の本が床に叩きつけられてもはやお構いなしだった。

クリストフは無意識な発作のようなものを、とうとう口に出してしまい、この家の中で最も傷つけてはいけない存在にナイフを突きつけてしまっていたことに気付いた。

「アルトのことを悪く言わないでよ。何一つ知らないくせに。もう

出て行つて。この部屋に入らないで。顔も見たくない。手紙を置いて、どこかへ消えて。ばか！」

クリストフはズボンのポケットから手紙を出すと、ベッドの上に置いて逃げるように、しかし足音は立てないように静かに部屋を出た。

逃げ込んだ先は自分の部屋だった。老人の振りをしなければいけない牢獄、と彼はひそかに呼んでいた。粗末な学習机に突っ伏して彼は静かに泣いた。もう、あの部屋に入ることはないだろう。心よりどこも失ってしまった。いや、そもそも以前からこの家に彼の居場所など存在しなかった。アレットはアルテュールがパリに行つてから、毎日手紙だけを生きがいにしていた。それにクリストフのお下がりの本だつて、お情け程度に読んでいたのかもしれない。彼女は本が叩きつけられたとしても平気だつたじゃないか。本が哀れな兄の唯一の友人だと彼女は知っていたにも関わらず。

下品で知能の低い使用人ドニとジゼル、生きているのか死んでいるのかもわからない父、ヒステリックで自分を認めてくれない母、自分の事しか考えることの出来ないわがままな兄、夢の世界へ閉じこもつて外へ出ようとしない妹。自分もこの家を形成する一部なのだと思つと、胸が息苦しくなつた。

やがて、いつものようにゲスト用の寝室から母の叫び声が聞こえてきた。三時半から四時の間に必ずあるヒステリックだ。

階段を下りながら踏み外してみようと考えたが、即死でない限り体が元通りに回復してしまうのを知っていた。それでは意味がない。この家を離れて、どこか遠くへ行きたかつた。

豪華な家具と絵画で飾り立てられた寝室は、クリストフにとって地下室の拷問部屋とさほど変わらなかつた。ドアというドアは鍵がかけられている。カーテンを閉め切っているため、部屋は薄暗く、背の低いクローゼットの上に置かれたランプだけでは、部屋の中の様子を把握できなかつた。

「このけだもの！ 私のクローゼットから百フラン盗んだね」

部屋に足を踏み入れるあり、彼女は叫んだ。声は裏返っていて、女声特有の耳に痛いものがあつた。手には彼女の父のベルトを握っている。

例え身に覚えのないことだとしても、罪を認めなければ重い罰が下されることを、クリストフはエリーズから学んだ。

エリーズはベルトを振り上げた。「一体、誰のおかげで、ここに住まわせて、もらつてると、思つてるんだ」

クリストフは経験上、うずくまったり怒ったりすればまた彼女の神経を刺激してしまうことを学習していたため、両腕で顔を守る以外の事はしなかった。腕にするどい鞭が何度も打ち付けられ、皮が剥がれ、血がにじんだが、クリストフは唇を噛みしめて耐えた。

「あんたは、あの男と、一緒だよ」

エリーズはベルトを投げ捨てたかと思うと、今度は息子の前髪を掴みあげて、蠟燭を覆っているガラスとクリストフの頬がくつついてしまふほどランプを近づけて言った。

「汚い目だね。あの男にそっくりだ。うちに出入りする『あれ』と同じ。いやしい泥棒の目の色だよ。本当にうちの子かい？」

クリストフが黙って涙を流していることに気付くと、彼女はランプを床に置いて、思いつきり二の腕をつねった。

「めそめそするんじゃないよ。あんた、まったくあいつにそっくりだ。育ててもらつてゐる恩義を忘れるなんて図々し子だね。それに比べたらアルトは本当にいい子だよ。アレットだって頭が弱いけど素直な子さ。あんたは一体誰に似たんだ。え？ この間みたいに仮病使つて同情を引こうつたつてそうはいかないよ。あたしは何だつてお見通しなんだからね」

前髪が数本抜ける音を耳にしながら、クリストフは身に覚えのない罪に対して何度も謝った。気が済むまでベルトで打つと、エリーズは部屋に息子を残して鍵をかけた。

彼が部屋から出してもらつたのは、それから五時間後のことだった。牢獄の鍵を開けたのは叔父のルネだった。その時にはクリスト

フは疲れて眠ってしまっていた。傷はほとんどが治りかけていたが、まだ完治はしていなかった。

ルネは仕事帰りでいくらか疲れているようだったが、甥っ子を抱きかかえると、彼の部屋まで運んで行ってベッドに横たえた。布団を肩までかけてやり、寒さで震える手が落ち着くまで、傍に座ってずっとクリストフの手を握っていた。一時間もすると震えも収まり、ルネはほっとため息をついて部屋を後にした。クリストフが本当に病弱で、寝込むのも仮病ではないと知っているのは、子供たちを除いて彼だけだった。

これはアルテュールが家を出てから、クリストフがルネの家で暮らすようになるまでの約半年間続いた。

ルネ・ブランシャール

十二月二日、土曜日の朝、クリストフがリビングへ下りていくと、コーヒーテーブルの上に二冊の冊子が置きっぱなしになっていた。

一つはアンナ・ヴェシエールの入学案内で、もう一つはラパール村の観光案内だった。クリストフはアルテュールが家を出てからというものの、ずっとアンナ・ヴェシエール学園に通いたいと思っていた。兄と同じ学校へ行くのは嫌だったが、そこと公立中学以外に学校を知らなかった。もしも公立学校へ行くとしたら、この家から通わなければいけない。ブランシャール家をはじめ、ラパール村に住む純粋なバンパイアたちは、そのほとんどがアンナ・ヴェシエールの卒業生だった。時々例外はあるものの、エリーズもロベールもその卒業生だった。クリストフは多少確信が持てなかったが、よっぽどのことが無い限り、アンナ・ヴェシエールに進学できると思っていた。七月に実施される入学試験に合格する自信もあった。なぜなら学年で一番の成績を取っていたからだ。

「クリストフ坊ちゃま、何をご覧おいでですか？」しわがれた声がねつとりとした口調で言った。

リビングの奥の部屋からてっぺんの禿げた赤毛の小男がやって来た。右頬に罪人の証である「p」という文字が焼き付けられている。エリーズの熱心な教育により、クリストフは彼を見るなり、条件反射のように吐き気を覚えるようになっていた。

「何も見てない」

クリストフは汚れてよれよれでみつともないドニのシャツの胸元に、汚らしいしみがついているのを見つけた。この男は、この家に仕えて十三年になるこの下品な男は、随分昔に人間の娘と「何か」をしたために奴隷の称号を与えられたわけだが、こんな男の相手をするとはよほど男に縁がなかったとしか思えなかった。

「いいえ、ドニは見ておりましたよ。学校の案内ですね？」

召し使いは冊子をつまみ上げて、これ見よがしにクリストフに見せた。笑った口からところどころ歯の抜け落ちた赤褐色の歯茎が見えた。

「アルテュールお坊ちゃまはこの学校でとても楽しく過ごしているそうですね。ええ、アレットお嬢ちゃまから聞きましたとも。ドニは何でも知っておりますから」

「無駄話をするつもりはない」クリストフは早口で言った。「掃除でもしてこい」

「おお。こわい、こわい」しかしドニはその場を動こうとはしなかった。そして冊子を裏返して言った。「おやおや、これは来年のものですね」

クリストフの目が微かに見開かれた。

「貸してみる」奪い取るように冊子を手につけて、裏に印字されている年を見た。《一九七三年度》となっていた。今は一九七二年だ。

「本当だ。でも本当にぼくを入学させてくれるのかな？」

「奥様に聞いてみたらどうでしょうか？」ドニはいやらしく下品な笑い声を上げた。「さて、取り合ってくださいるかどうか」

「取り合ってくれるさ。ぼくだって、お母さまの子供なんだ。多分、きつと」

エリーズはダイニングルームにいた。テーブルに頬杖をついて、うとうととしているらしい。口を開かなければ、眉を吊り上げなければとても美しい姿だった。くすんだブロンドの髪はあたたかい太陽の光に反射して輝いていて、非の打ちどころのない素晴らしい横顔は、古代ギリシア時代の彫刻家の最高傑作といったところだった。クリストフは兄妹の中で一番母親に似ていたが、彼女はそれを認めたがらなかった。時々クリストフを別人と勘違いしているような言動も見られた。彼女にとっての理想の息子になれば、いつかは存在に気付いてくれる、認めてくれると考えていたが、体罰がエスカレートしていくこの頃は、はたしてそんな日は来るのだろうかという考えも浮かんでいた。

「お母さま、ぼくはアンナ・ヴェシエール学園に通えるんですよ？」

エリーズは重たそうに瞼を上げて、周囲を伺うように薄いグレーの瞳を左右に動かした。それがクリストフの姿をとらえると、彼女はかつと目を見開いて、わずか十歳の息子を無言でなじった。彼女の白く細長い指に力がこめられ、みるみるうちに頬に食い込むように爪が伸びていった。

「今、何て言ったのかしら？」

クリストフは勇気を振り絞って、母親の目を見た。彼の深緑色の瞳には恐怖が浮かんでいた。彼はつねづね考えていたのだ。自分はいつか《居酒屋》のラリーのように死ぬのではないかと。まだエリーズはロベールをなぐり殺してはいなかったが。

「ぼくはアンナ・ヴェシエール学園に通えますか？」声は震えていた。

エリーズは立ち上がった。爪はすでに五センチほど長くなっていた。クリストフは二歩退いた。

「あんたは本当に疫病神だね！ ルネとそっくりだよ。どこに行きたいって？ どれだけ学費がかかると思ってるんだい。お前なんか公立校でも勿体ないくらいだよ」

エリーズは後ろを振り返ると、食器棚の扉を開け、普段は滅多に口にしないような酷い言葉を吐きながら、皿だろつとカップだろうと何だろつと、見境なく手にしたものからクリストフ目がけて投げつけた。彼は呆然とその様子を眺めていた。あっけに取られるあまり、手の指一つ動かすことが出来なかったのだ。

ロベールが実家から持って来た、陶磁器の高価な皿がクリストフの足元で割れた。飛び散った破片の一つは直径八センチほどで、勢いよく飛び上がって、鋭利な角で少年の右目から約一センチ下をざっくりと傷つけた。エリーズはまだ食器を割り続けていた。

「一体どうしたんです？」ジゼルがドアの間から顔を出した。

ドニと同じく禁忌を犯し、「p」の烙印を受けたこの褐色の肌を

した若い女性は、クリストフの次にこの女主人に邪険に扱われていたため、あまり驚いてはいなかった。彼女はダイニングの様子を確認すると、すぐさまドアを閉めた。

「どうなってる？」ドアの向こうでルネの声が尋ねた。焦りが混じった声をしている。

「またいつもの発作です」

「病院やカウンセリングは受けさせたのか？」

「まだです。すみません」

ルネはうめき声を上げた。「どうしよう。僕が行くとヒステリーがひどくなるんだ。ああ、ドニ。待ってたよ。クリストフを連れてきてくれ。怪我をしてるんだ。頼むよ、君しかないんだ」

ドアが再び開き、ドニがやって来た。彼はエリーズの様子にぎょっとした顔をしたが、すぐさまクリストフの方を向いて、茫然としていた彼を抱きかかえて部屋を出て行った。

廊下に連れてこられたクリストフは、混血の叔父と二人の使用人に囲まれているその状況に顔をひきつらせたが、それよりも右目の下を触って、大量に出血していることを知ってパニックに陥りかけていた。

「クリストフ、落ち着くんだ」

ルネはトレンチコートのポケットからハンカチを取り出して、甥っ子に差し出した。

「これで傷口を押さえなさい。痛くても強く押さえるんだ。子供だろうとバンパイアには輸血が出来ないんだから」

クリストフは顔をしかめつつも、言われた通りにした。ハンカチは調香師というルネの職業柄、いくつもの花の香りが混じった不思議なおいがした。

ルネはクリストフを無理やりにも抱きかかえると、二人を振り返った。

「ジゼル、ありったけのバケツを集めて水を汲んでくるんだ。そうしたらあの部屋に撒くんだ。君たちの仕事が増えるかもしれないけ

ど、鎮静剤が無いならそれしかない。バンパイアは水が嫌いだからね。多少は正気になるだろう。頼んだよ」

外はまだ太陽が出ていた。

ルネは玄関ホールに置かれている傘立てから持って来た傘を手に、トレンチコートのフードを被ると、メインストリートを挟んだ反対側にある自宅アパートメントまで早足で向かった。

ルネの部屋は二階にあった。階段を上って裏通りに面したベランダの突き当りが玄関だった。玄関ホールというようなものはなく、入ってすぐに低い靴箱が置かれていて、左手にリビングに続くドアがあった。

ルネはリビングの葦で編まれた新しいソファにクリストフを座らせると、表通りに面した窓際（カーテンは閉め切っている）のパネルヒーターの電源を入れた。部屋の隅のクローゼットから紙箱を探し出して、消毒液、軟膏、ガーゼ、テープを手にも、ソファの前にあるコーヒートーブルに腰を下ろした。

クリストフは顔をしかめたまま、興味深そうに部屋を見回していたが、ルネが正面に座ると、急に顔を緊張でこわばらせた。

「ハンカチをどかしてごらん」

クリストフは首を横に振った。ルネはため息をついた。

「何も悪いようにはしないよ。君たちをどうにかしてやろうと思ってるなら、もうとっくにやってるさ」そう言って、ハンカチに手を伸ばした。

「あ」

クリストフは言葉を止めた。胸中に罪悪の意識が込み上げてきて、その先を言うことができなかったのだ。代わりに、叔父の鼻を控え目に指差した。

「どうした？ ああ、これか」

ルネは鼻先に出来た、やけどをしたようなただれを触って言った。少しも動じず、もう慣れているというような口ぶりだった。

純粹なバンパイアは日光などものともしないが、混血、つまりバ

ンパイアの血が少しでも混じっている人間は、直射日光だろうと日陰だろうと、少しでも光を浴びれば、流れているバンパイアの血が濃いほど、浴びた部分がやけどのようになってしまい、なかなか治らないのだ。命を落としてしまことも少なくはない。本屋のマリアンヌ・ブシエの母親はそれで命を落としていた。

「ごめんなさい」

ルネはためらいがちにクリストフの肩に手を当てた。「傘を差さなかったのは僕の判断だから、気にすることはないよ」

「でも」

「こんなの放っておけばそのうち治るよ」

クリストフは叔父の深緑色の目をちらりと見た。これまで生きてきた中で、彼ほど心の広い大人を見たことがなかった。怪我をしたときに手当てをしてくれたのは？ 自分の身をていしてまで助け出してくれたのは？ 彼だけだ。考えてみれば苦しんでいるときにいつもそばにいてくれた。それを今日までずっととうとましく思い、蛆虫のように考えていたのは誰だ？ クリストフは唇を噛んで、これまで自分が彼にしてきたことを罰した。

「クリストフ、きみの怪我の方が問題だ。手当てをさせてくれるかな？」

クリストフは頷いて、彼の言う通りにした。ハンカチをどかすと血はもう止まっていた。ルネは消毒し、軟膏を塗り、ガーゼを当てて、テープでそれを固定した。戦争へ行つて軍医でもしていたかのような手際の良さだった。

治療を終えると、ルネはあたたかい紅茶を持ってきた。一口飲むなり、クリストフは体だけでなく心もぼかばかしてくるような気がした。ドアの隣にサイドボードが置いてあり、そこに香水の入った小瓶と、写真立てが置いてあった。

「これは、グラスで最初に作った香水だよ」ルネは小瓶を手に取って言った。

「グラスに行つてたの？ あの香水で有名な？」

「ああ。六年ほどね。あまりいい出来じゃないけど、よかつたら嗅いでみるかい？」

クリストフが遠慮がちに頷くと、ルネはパネルヒーターの隣の物干し台から乾いたハンカチを一枚とって、香水を二滴たらし、クリストフの顔の前で振った。何の匂いかはわからなかったが、気分でいうと、不安とためらいと高揚と希望が感じられた。これを調査した時の叔父はそんな気分だったのだろうか。

「何歳だったの？」

「これを作ったときかい？　十八か十九歳の頃だから、今から十年以上前だよ」

ルネの声はとても落ち着いていて穏やかだった。クリストフは叔父の声には人の心を落ち着かせる何かがあるのかもしれないと考えた。彼の関心は香水から別のものに移っていた。

「あの写真に写っている人は？」

クリストフは立ち上がって、写真を覗き込んだ。波打つブルネットの髪をした、ルネにそっくりな目元をした若い女性が優しくほほ笑みかけてきた。彼女の肩を抱きかかえた男性の顔は、タバコか何かで焼かれていた。穏やかそうに見えるルネが、こういう荒っぽいことをするのは意外だった。

「僕の母だよ。抱っこされている赤ん坊が僕だ。フルール・ディエイエといって、当時は町はずれの古い小屋に住んでた。その頃はバンパイアじゃない人たちはみんな小屋に住んでただけだね」

「ディエイエ？」

「母は未婚だったからね」

ルネはさりげなくクリストフの髪を撫でた。とても気を使っている優しい手つきだった。

「僕も七歳でブランシャール家に引き取られるまでは、ルネ・ディエイエと名乗ってたんだ」

「どうして引き取られたの？」

「母が病死したんだ。知つての通り、僕の父親は君のおじいさんだ

からね」

「ごめんなさい」クリストフは写真から離れた。

ルネは写真を手に取って、母親の顔をじっと見つめた後でクリストフを見た。「謝ることなんかないよ。それに昔のことすぎて、本当に母が存在していたかどうかさえ危ういんだ」

「ルネがいるんだから、お母さんは存在したんじゃないの？」

「遺伝子というか肉体的にはね。でも、記憶に関してはほとんど忘れかけてるんだ。いまだに母の死を認めたくないだけかもしれないけど。とにかく母が僕の事をどう思っていたにしろ、僕は声さえはつきりと思いつくことができないんだ」

「もし、身近な誰かが死んだとしたら、僕もそういう風に思うようになるのかな？」

「さあ、わからない。僕の場合は離れている時間が長すぎるからね。母が亡くなってからいろいろなことを経験したよ」ルネは頭を振った。「ただ、母が大切な人じゃなかったっていう意味じゃないんだ。優しくて働き者な母が大好きだった」

「ねえ、ルネ」クリストフは呟くように言った。「ぼくが死んでもお母さまはぼくのこと覚えていてくれると思う？」

ルネはショックを受けたような表情を浮かべ、そして、何も言わずにクリストフを力いっぱい抱きしめた。

「そんなこと言うものじゃないよ。ああ、クリストフ。なんてことだ 子供は親より先に死んではいけないんだよ」

ルネはクリストフから腕を振りほどくと、肩を掴んだ。

「きみは長生きしなければいけない。絶対にね」

そう言うのと、ルネはまた甥っ子を抱きしめた。

クリストフは自分が涙を流していることに気が付いた。その感情がどういふものか理解できなかったため、きつと叔父のコートに染みついた、さまざまなおいのせいだと思い込もうとしたが、そんな理由づけすら追いつかないほどに、涙が次から次へと溢れ出した。同時に、彼の子供に生まれてくれば、透明人間のように扱われ、誰

かを怒らせはしないかとびくびくして過ごす必要もなかったのにと
考えて、少しだけ寂しくなった。

村長の退任

十二月八日金曜日の午後二時、ラパール村に珍しく夕刊が配られた。村に四か所ある掲示板に張り紙がされ、村人たちは家の近所で、電話で、花畑で、パッサージュで、エコールで、役場で、教会で、そのことについて話をした。

クリストフはその知らせをエコールからの帰り道に、掲示板で目にした。

<シモン・リュベン、村長を退任す>

ラパール村一番の富豪であり、名誉村民でもあったシモン・リュベン氏（七六）が、突如として九年勤めた村長職を辞任すると宣言した。氏は廃村の危機を迎えていた当村を、たった三年で観光名所にのし上げた素晴らしい采配の持ち主である。

「四年の任期を全うできず、信頼してくれていた村の人々には本当に申し訳ないという気持ちしかありません」と氏は語った。

現在役場は後任者について検討しているが、氏の代わりを務められる人物を探し出すのは困難を極めるだろう。

それから二日後の十日午後六時半から、エリーズとロベールをはじめとする、サングヌーブに住居を構える村の有力者たちが役場に集められ、後任の件について話し合うことになった。

クリストフは自室の部屋の窓から、両親が家を出ていくのを眺めていた。父の姿を目にしたのは実に二か月ぶりの事だった。くすんだブロンドの髪は汚れて黒っぽくなっていて、顎には不精髭を生やしていた。目は落ちくぼんで、ぎよろりと不気味に輝いていたが、常に何かにおびえているかのように挙動不審で落ち着きがなかった。母は夫と並ぶのを拒んで、数歩先を歩いていた。

二人の姿が見えなくなるのを見計って、クリストフは極力音を立

てないように玄関ホールへ下りていき、ルネの家へ電話を掛けた。
今頃ドニは風呂掃除を、ジゼルは夕食の片づけをしていると知っていたからだ。

「もしもし、ルネ？　今大丈夫？」

「ああ、構わないよ」そう言った声は少し疲れているように感じられた。「どうかしたのかい？」

「うん。特に何もないんだけど」クリストフは受話器のコードを指にぐるぐると巻きつけながら言った。「シモンさんが村長を辞めたって聞いたから」

「その話か。そうだね、僕も聞いたよ」

電話の向こうから、フォークかナイフが食器に当たる、カチカチという音が聞こえてきた。

「少し前から具合が悪そうだったからね。みんな覚悟はしてたみたいだ。シモンさんのことだから身の回りはきちんと片づけたんだろうね」

「どこが悪いの？」

ルネは声を潜めた。「純粋なバンパイアだけが罹る不思議な病気だよ。体が腐っていくんだ」

「治るの？」

「まだ治療法が明らかになっていないんだ。アメリカのバンパイア研究者たちは頭を抱えてるよ」

ルネはそう言うってから、咳払いをした。

「ところで、エリーズたちはもう役場に行ったのかい？」

「うん。さっき出て行ったところ」

「最近どう？　その　ヒステリーは起こさない？」

クリストフは誰もいないにも関わらず、用心深そうに周囲を見回してから答えた。「うん。たぶん。いつもの日課みたいなものはあるけど」

「そう。もし何かあったら、どんなに些細なことでも僕に相談するんだよ。いいね？」ルネは優しい口調で言った。

「うん。わかつてる」クリストフは小さく笑った。

それから、クリストフはアレット以外の人物にはじめて学校での出来事を話した。ルネは黙って聞きながら、時々相槌を打ったり、質問をしたり、感心したりしていた。クリストフが話し終わると、ルネは現在取り掛かっている新しい香水についての話をしてくれた。役場の観光部長から、村の花を用いた花祭りの名刺代わりになる香水を作るように頼まれているというのだ。それと、もうすぐ学校がクリスマス休暇になるから、アルテュールとロマンの帰省のことも話題に挙がった。

「ロマンが帰ってきたら土産話を聞かせてもらおう」

「村長の息子の？ ルネはロマンと知り合いなの？」

クリストフは感嘆の声を上げた。ロマンといえば、子供なのに大人でも読むのに苦労するような本を読んでいて、この世のあらゆることを知っているというイメージがあつたからだ。

「四年ぐらい前に、香水について教えてくれって頼まれたことがあつたんだ。それがきっかけだったかな。良い子だよ。クリストフもきつと仲良くなれると思う」

「うん。ありがとう。楽しみにしてるね」

あつという間に二十分が過ぎていた。ルネの話に耳を傾けながら、玄関ホール古いアームチェアに腰かけていると、受話器を当てていない方の耳が雪の中を歩く足音を聞き取った。

「ごめんね。二人が帰ってきたみたい」

クリストフは早口でそう伝えたと、返事も待たずに受話器を下ろした。そして命の危機といわんばかりに、あらん限りの力を振り絞って、大急ぎで階段を駆け上り自室に逃げ込んだ。ドアと床の間の隙間に耳を近づけると、音がよく聞こえてきた。

次の瞬間、玄関扉が勢いよく開け放たれた。先に入ってきたのはエリーズだった。雪と泥とタバコと役場の木材においがした。

「いまいますい！」彼女は叫んだ。「想像するだけでもおぞましい」彼女に続いてロベールが入ってきた。雪と泥とタバコと役場まで

はエリーズと同じだったが、古びた紙と象牙のにおいもした。彼はリビングへ行ったかと思えば、毛皮のコートを身に付けてまた家を出て行ってしまった。

「一体何があったのでございましょう？」

ドニの声が地下室の方からエリーズに近づきながら尋ねた。水と煤と石鹼のにおいがする。

「何があったですって？」女主人の声は怒りのあまり上ずっていた。「何があったか？ ええ、聞かせてあげようじゃないの。混血が村長になるのよ。こん、けつ！ 知能が低くて野蛮ないきものよ。それだったらオウムにでも任せるべきだわ」

「奥様、ワインをお持ちいたします」ドニが言った。「温めたワインを用意してまいります」

「ええ、頼むわ」

エリーズはそう言っていると、リビングへ行きソファに腰を下ろした。まだ気が立っているようだった。

クリストフはベッドに潜りこんで、母のいら立ちが収まるように祈った。

ロマンの考察

十二月二十二日の昼過ぎに、隣町を経由して毎時十五分にラパール村の停留所に停車するバスに乗って、パリからロマン・リュベンが帰ってきた。朝から降っていた雪はまだ止まず、少しちらついていた。

彼は革張りで立派な装飾の施された大きなトランクと、買ったばかりのパリ土産の入った紙袋を手に、端正な顔に涼しげな表情を浮かべていた。苔色のダッフルコートに黒い襟巻を巻いているだけに、妙にハンサムに感じられた。夏に村を出た時よりも背が伸びていて、顔立ちもいくらか大人のようになっていた。彼は父親よりも亡くなった母親に似たらしく、シモンとはあまり似ていなかった。

その時、クリストフはサングヌーブの自宅からルネのアパートへ向かう途中で、ちょうどバス停を通りがかったところだった。バスから降りたばかりの少年が誰であるか知っていたが、来年の九月になってもアンナ・ヴェシエール学園に通うことが出来ないと思うと、それだけで気分が重たく沈んだ。クリストフは黙って通り過ぎようと俯いたが、バスから降りたばかりの少年　ロマン・リュベンに声を掛けられたため、驚いて足を止めた。

「やあ、君はこの子だ？」

ロマンは自信に満ちて輝くような表情をしていた。クリストフが口を開こうとすると、彼は右手の平を見せて制止した。

「　当ててみよう。日中堂々と道を歩くことができ、黄土色の髪をしているということは、ブランシャール家の子だな？　分家に君ぐらいの子供はいないから、本家の子だ。となると、ぼくが会ったことがないから、君は真ん中の子だな。そうだろう？」

ルネから話を聞いていたため、クリストフは普段なら抱くはずの警戒心を抱くことなく、素直に頷いた。

「名前は？　ぼくはロマン」

「クリストフ・ブランシャル」

ロマンは紙袋を持った手でクリストフの肩を抱き寄せると、朗らかな声で歌うようにこう言った。

「ブランシャル？ それが何だ。姓なんてこの村を出たら何の意味もなさなくなる。名乗る価値さえない。そんなもの捨ててしまえばくはもう名乗らないと決めた。ばかばかしい。きみもそうだろ。この村の体制にうんざりしてるはずだ」

前触れもなく演説をするこの少年にクリストフはあっけに取られてしまい、何も考えることなく頷いた。

「よし、じゃあ今日というこの日に同盟を結ぼう。ぼくと君が初めて出会った記念だ。どうしてこんな狭い村で十年近く一緒に過ごしていながら、一言も言葉を交わす機会がなかったのだろうね？」

「年が離れているから？」

「年か。それもあるな。五年は離れているね。それからお互いの思想が食い違っているというのも理由の一つだろう。さて、ところでこの列車はどこに続いていると思う？」 ロマンは自分たちが歩いている先を指さした。

「さあ、わからない」

クリストフはロマンの持っている大きなトランクを見た。

「ロマンくんの家？」

「敬称なんてぼくたち子供には関係ない。それに家にはいかない。あんなところ、厨房から出た残飯ごみだ」

「どうして？」

「どうしたもこうしたも、見ればわかるよ。親父は潔癖症かつレイシストで、死を恐れる愚か者だ。姉貴は旅先で知り合ったベルギー人と結婚することを夢見ている。ぼくはまだお花畑には行きたくない」

「家族をそういう風に言うなんて意外だな」クリストフは苦笑いを浮かべた。

「ぼくは昔からこうなのだよ」そう言っただけにうやうやしい態度で

胸に右手をあてがった。「きみも不満があるのなら言ってみるべきだ。楽になる」

「言えないよ。言ったら追い出されるかもしれない」

「言えよ。言うべきだ。誰も聞きやしないよ。さあ、言ってみる。言えないならぼくが代わりに言っただけよ」

「じゃあ、言うけど、妹の悪口は言えないよ」

「その意気だ」ロマンは片方の唇を吊り上げて笑った。「さあ、言っただけ」

「兄はわがままだ。自分の言うとおりにならないとすぐに怒る。乱暴で思いやりがない。お父さ 父さんは何をしているのかわからない。顔色も悪いし、目つきも変わってきてる。何か悪いことをしているのかもしれない。わかってるのは父さん宛てに赤い封筒が届けられるということだけ。ただのコレクターなだけかもしれないけど。お母さまは 彼女は怒りっぽい」

「それだけ？ 母親に関することはそれだけなのか？」

クリストフはロマンから顔を背けた。「うん。これ以上はもう無いよ。それにロマン、きみのお母さんはもう亡くなったんでしょ？ なおさら言えないよ」

「ああ、そう」ロマンはがっかりした表情をして、道に積もった雪を蹴った。「ぼくのストレスを発散させる方法が、どうやらきみには合わなかったようだね」

「ストレス？ ねえ、ロマン。気分を悪くしたなら謝るよ」

「いいよ。その必要はないから」

ロマンは五歩ほど大またで歩いていって、突然振り返ってクリストフの顔を覗き込んだ。

「なあ、どうしてきみはそんなにおどしているんだい？」

「どういふふうに？」

「言われるまで気付かなかったのか？」ロマンは追いついたクリストフと並んで歩きながら頭を振った。「まあいいや。ところで、この道はどこに続いていると思う？」

クリストフはそこではじめて顔を上げて、目の前に続く道を改めて見てみた。パッサージュの入り口だった。アーケード屋根の下ではコートを着た人たちが買い物をしている。それを眺めながら、アーケード屋根の設置に至ったいきさつをぼんやりと思い出した。

今いる道を右手に曲がった先が、ルネの住んでいるアパートだと気付くと、クリストフは笑顔を浮かべてロマンを見上げた。

「もうわかったかな？」ロマンが微笑みかけた。

「うん。やっとな」

「ねえきみ、なぜ子供だけでパッサージュに行ってはいけなか知っているかい？」

「禁止されてるからでしょ」

「何かの取扱説明書に忠実なロボットみたいだな。質問を変えよう。なぜだめなのか考えたことはあるかい？」

「ない」クリストフは即答した。「パッサージュに行く時はいつもそのことしか考えないから」

ロマンは足を止めてトランクを握りなおした。

「学校で誰かをいじめてはいけけないのはなぜだ？なぜ盗みをしてはいけけない？おもちゃを持って行ってはいけない理由は？禁止されているからという答えは認めないぞ。さあ考えて」

クリストフはなんだか面倒なやつだなと思いながらも、ロマンの言うとおりにした。家族やルネ以外の人物とこんなに長く話をしたのははじめてだったからだ。

「道徳的に良くないから？」クリストフは言った。「倫理に反する行動だから？」

「おお、いいね。でもそれはおもちゃには当てはまらない。いじめや盗みは良くないことだけど、おもちゃを持って行くこと自体は罪じゃない。持って行ったとしても警察には捕まらない」

と、そこで言葉を切って、クリストフが何かいうのを待っていたが何も言わなかったためロマンは続けた。

「じゃあ、なぜ禁止されることになったのか考えてみよう。ぼくは

学校で以前生徒たちがおもちゃを持って行くことがブームになったがために、生徒がそれに夢中になって授業に集中しなくなってしまうたと想像する。あくまでも想像だけだね。そうすると、なぜ先生たちが禁止にしたか理由がわかってくる。つまり禁止というのは、以前起きたことを繰り返さないために、その元となった行為そのものを封印するという意味があるんじゃないかと、ぼくは考えるわけだ。ご理解いただけたかな？」

「う、うん」そう答えたクリストフの顔は火照っていた。「ロマンはすごいね」

「すごくなんかないさ。この間読んだ小説にこんなことが書いてあっただけで、ぼく自身が考え出したことじゃないんだ。ぼくは他人の言葉を借りてそれっぽく喋っているだけで、ただのオウムにしかすぎないからね」

「そうなんだ」クリストフは先日の母親の発言を思い出して、返事に困ってしまった。「じゃあ、パッサージュに行っちゃいけないってことも、過去に起こった出来事を繰り返したくないからなんだね？」

「大人たちは誰も何も言いたがらないけど、ぼくはそうじゃないかと考えてる。それで、村の資料館から古い新聞を調べてみたんだ」

「探偵みたいだね。どうだったの？」

「探偵ねえ。その仕事にあまり憧れないな　そう、十五年前にあそこで純粋なバンパイアの子供が一人死んでたんだよ。事故だったそうだけど、不可解な証言が多いんだ。でも、友人をはじめとしてパッサージュに住んでいる人たちは、そのことについて話したからないんだ。だから真相は風の中ってやつだね」

ロマンの考察（後書き）

ロマンの喋り方について；

彼はわざとやっています。これを書いた前後に「デミアン」を読んでたのもあるけど、一番の理由はロマンが年齢的に中二ってことかな。

チョコレートと警告

アパートに到着したものの、ルネは外出中で留守だった。ロマンはいつもそうしているかのように、一階に住むレニエ夫人を訪ねて、帰ってくるまで待たせてもらうように頼んだ。夫人は息子夫婦と住んでいるレース編みの職人で、決して愛想は良くなかったものの、追い出すようなそぶりは見せなかった。

表通りを歩くルネの姿を見つけたのは、窓際に立っていたクリストフだった。二人は夫人に礼を言くと、外に出てルネを待った。彼はいつものように髪を束ねて、よれよれのダッフルコートに身を包んでいた。彼のような性質を持って生まれた人には切っても切れない縁のため、大きなこうもり傘をさしていて、もう片方の手には仕事道具の入った革のかばんを提げていた。

「お帰り、ルネ」とロマンが言った。

「ただいま。久しぶりだね、ロマン。僕もお帰りというべきかな？」
「それならばくもただいまと言わなくちゃいけないね」

クリストフはこの会話に意味もなく笑った。二人も彼を見て笑った。

「寒いな」

ひとしきり笑ったところで、ルネはコートのポケットから部屋の鍵を出しながら、子供たちを見て振り返った。

「上がっていくんだろ？」

「もちろん」ロマンはトランクを持ち上げた。

ルネは部屋に入るなり、真っ先にリビングのパネルヒーターの電源を入れた。ロマンは部屋に入る前にトランクに付いた雪や融けた水をハンカチでぬぐった。

クリストフはルネの部屋のさまざまな香りが混じった匂いが好きだった。死人のようにおし黙って、口を開こうともしなくなった自室は匂いひとつしかないからだ。

ルネはかばんを鞆のソファの足元に立てかけると、キッチンへ行って湯を沸かしはじめた。

「適当にくつろいでいてくれ」

部屋に入ると、ロマンは紙袋から薄い長方形の紙箱を取り出して、コーヒーテーブルの上に置いた。パリの有名なチョコレート菓子店のロゴが印字されている。その文字は新聞の広告欄で時々見かけたが、実物を目にしたのはこれがはじめてだったため、クリストフは二足歩行をする犬でも目撃したかのように目を丸くして、紙箱をじっと見つめていた。

クリストフの視線に気付いたようで、ロマンは優しく微笑んだ。

「あとでみんなで食べよう」

「うん」

湯が沸くのを待っている間、ルネは戸棚から鎮痛薬の錠剤が入った小瓶を取り出して、子供たちに見えないように背を向けて、コップに注いだ水道水で三粒飲んだ。

バンパイアと人の間に生まれると、日光に当たることもできなければ、始終倦怠感と軽い体調不良に悩まされるようになってしまうのだ。その症状を緩和するために、洗礼を受ける混血者が多く、十五、六歳でその儀式を済ませるのが一般的だが、ルネは三十を過ぎた今でも洗礼を受けたがらなかった。

「紅茶、それともコーヒー？」キッチンからルネが尋ねた。

「紅茶」とロマン。

「じゃあぼくも」とクリストフ。

じきに、ティーカップを三つトレイに載せて、ルネが部屋に入ってきた。

「学校は今日から休みなのかい？」ルネが聞いた。

「うん」ロマンはティーカップを受け取りながら答えた。「他の子たちがクリスマスカードとプレゼントを贈るっていうから、あとでパッサージュに買いに行かなきゃいけないんだ。明日は店じまいしちゃうから」

クリストフは去年のこの時期に、風邪を引いて寝込んでいたことを思い出した。アレットがパッサージュのおみやげに本を買ってくられて、その際にロマンと一緒に買ったと言っていたことも。

「それじゃあ、一服してから行ったらどうかな？」

そう言つて、ルネは返事を待つようにクリストフを見つめた。

「ぼくも一緒に行つていいの？」

「もちろん」ロマンは言った。「遠慮なんかいるもんか。でも、なんだかルネは行かないように聞こえるな」

「実は用事があるんだ。役場に試作品をいくつか届けに行かなきゃいけないくてね」

「この前言つてたやつ？」クリストフが尋ねた。

「ああ。ちよつと厄介なんだ。話はそろそろ切り上げて、いい加減ティータイムにしないかい？」

ロマンは包み紙を開けて、中からチョココレートを出した。二十四個のチョココレート菓子が、金色の包み紙に一つ一つ丁寧に包まれている。そのうちの一つを彼はルネの母親の写真の前に置いた。

*

二時半に三人は部屋を出て、パッサージュへ行く道と、中心部へ行く道でそれぞれ別れた。ロマンはパッサージュへ行く前に一旦家へ戻り、トランクなどの荷物を置いていくことにした。

リュベン邸は村で一番大きなお屋敷だったが、シモンとロマンの姉マルゴとの二人家族では家を管理しきれないため、五人の召使いと二人の庭師を雇っていた。庭にはゴールデンレトリバーが放し飼いになっているが、ロマンを家族と認識していないため、彼の姿を見るとけたたましく吠えたてた。

「参っちゃうね」

逃げるように自宅の門から出てきたロマンは言った。

「家を留守にしていた間に養子をもらわれた気分だ」

パッサージュへ行く途中で、クリストフたちの住むサングヌーブを通りかかった。目を凝らさなくとも、エリーズに肩を抱きかえられたアルテュールが自宅の玄関をくぐる姿が見えた。今晚から彼女の態度はもつとひどくなるかもしれないと思うと、気が重くなるのを感じた。

「ところで、君はずいぶんとルネに懐いているようだね」

パッサージュの商店街を半分ほど進んだ時に、ロマンが唐突にそう言った。妬みや僻みといった感情は一切込められておらず、偶然すれ違った女性に対して、さっきの人はきれいだったね、というよなニュアンスだった。

「うん」クリストフはやや誇らしげな表情で答えた。「ルネにはよくしてもらってるよ」

「それならよかった。実は彼から君について少し聞かされているんだ」

「どういう風に？ 何て言ってたの？」

「上の子よりも聞き分けがあるとか、生まれつき体がそう丈夫じゃないとか、そういうことさ。一叔父としての率直な感想ってところかな」

「ふうん」クリストフは嬉しそうだっただ。「ロマンはルネと仲良しなんだね」

「それほどでもないさ。世代も宗教が違わなければ親友になれたかもしれないけどね」

「そういえば、カトリックについて聞いたかったんだ。誰にも聞き出せなくて」

「もしかして、君は洗礼を考えているのか？」ロマンの声は心なしか低くなった。

「ううん。あんまり。ちょっと興味があるだけ」

「洗礼だけは受けるなよ。宗教が人の心を支える力を持っているにしても、僕たちバンパイアにとってはろくなことが無いからね」

「どうして？」

「人間は僕たちの弱点を十字架だと思い込んでいる。今は、僕たちは何の信仰も持っていないからそんなの痛くもかゆくもないだろ。でも、信仰を持ってしまえばそれが弱点になる」

「弱点っていつても、ぼくたちは誰とも戦わないよ」

「今のところはね。でも、本当に洗礼を受けたい気持ちがあるなら、そうだな　僕ぐらいの年になってから受けるかどうか決めるべきだと思うよ」

「　実をいうと、この間ルネについて行って教会のお手伝いをしたことがあるんだ。すごく楽しかった。ぼくはそこで自分の居場所を見つけたんだ」

「じゃあ、今の君には何を言っても無駄というわけか」

ロマンはイギリス人のように肩をすくめた。クリストフにはなぜかその姿がなぜか肯定的な態度に見えた。

入学許可と洗礼

アルテュールの帰省は、それまで以上にクリストフをルネの元へと駆り立てる原因になった。普段は次男について無関心なエリーズだったが、行動を把握していないと気が済まないようで、例え置き手紙を残していたとしても、外泊しようものなら怒り狂ってルネを真夜中だろうと呼び出しては、泥棒だとか誘拐犯などと言って、しまいには私の家の財産が目当てなのだろうと罵るのだった。そのたびにクリストフは叔父に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになるのだが、ルネは気にしていないというように甥っ子の頭を撫でるのだった。

アレットの城はアルテュールのものになり、クリストフは隔離された牢獄で兄の残りの帰省日数を数えながら過ごした。そんな中、クリストフはロマンと偶然町で出くわした。彼は同級生に渡すお土産を選んでいところだった。少しおしゃべりをして別れたのだが、彼はその際に手紙を書く約束してくれた。

一月五日にアルテュールが村を発すると、アレットは一週間ほど抜け殻のようになった。その可能性はあまり高くないが、もしもアルテュールがほかの女性と結婚しようものなら自殺しかねないだろう。兄が去ってクリストフの生活は元通りになった。

ほとんど毎日のように学校を終えたとルネを訪ねた。一階に住むリース職人のおばあさんとも顔見知りになり、彼女はこの村に伝わる昔話や、バンパイアと人の混血者の生活について教えてくれた。

その日クリストフはある決心をしていた。おばあさんの肩をもみ、お茶を作るために湯をわかし、掃除をしていながらも、内心はそわそわして落ち着かなかった。

「やあ、クリストフ。来てたんだね」

と五時半ごろにルネが慣れた様子で扉を開けて声をかけた。おば

あさんに礼を言うと、クリストフに視線を戻した。

「待たせて悪かったね」

「うん。ルネこそお疲れ様」

クリストフはソファから立ち上がると、おばあさんに礼を言つてルネの後について行った。

「それで、今日はどうしたんだい？」下駄箱の上にアパートの鍵を置きながらルネは穏やかな口調で尋ねた。

「うん。ちょっとね 相談したいことがあるんだ」クリストフはもじもじして答えた。

「今更何を遠慮してるんだい。さあ、言つてごらん」

二人はリビングに入るとそれぞれソファに腰かけ、ヒーターの電源を入れた。

「うん」クリストフは深呼吸した。「ぼく、実はアンナ・ヴェシエール学園に進学したいんだ」

ルネは少し驚いた顔をした。「姉さんにはもう相談したのかい？」

「うん。少し前にね。そうしたら」

「ああ、あれかな？ 厨房の」

クリストフは頷いた。実の親に断られたことを例え血が繋がっているとはいえ、叔父が許してくれるはずもない。クリストフは提案を突っぱねる言葉を鋭い口調で言われるのを覚悟して、両膝の上で手を握りしめた。

「そういうことなら、いくらでも引き受けてあげるよ。ずっと悩んでたんだろ？ こっちにおいで」

ルネは自分の隣に腰を下ろすように言った。クリストフは素直に従った。ルネは甥っ子の頭を優しく撫でながら、落ち着いた口調で言つた。

「姉さんには僕から言つておいてあげよう。きっとわかつてくれるはずだよ。学校の入学希望書にはもう必要事項は書いたのかい？」
「返事をもらつてからにしようと思つて 前に家にあつたやつはなくなつちゃつたから、改めて送つてもらふんだ」

「そうか。試験は四月だからまだ間に合うだろう」

「でも、やっぱり半分はぼくが払うよ。今はまだ駄目だけど、大きくなって働くようになったら少しずつ返していきたいんだ」

「遠慮することはないよ」ルネは笑った。「可愛い甥っ子のためだ。それに、そんなことを考えるよりも、試験の勉強をしなくちゃいけないよ」

「うん　本当にありがとう」

その後、六月に行われた入学試験で、クリストフは一番の成績を収めた。その頃になると、彼は叔父のアパートで生活するようになり、ほとんど家には帰らなくなった。ある日を境に、エリーズもロベールもあまりそのことについて気にかけなくなり、村で顔を合わせても赤の他人のようにふいと顔を背けてしまうようになった。

八月にクリストフは学用品を買うためにルネと一緒に隣町へ行き、制服や礼服を新調してもらった。これまでエリーズはアルテュールのおさがりを次男には着せたがらなかったため、彼は誰のものかわからないだぶだぶの礼服しか着させてもらえず、記念撮影のたびに写真屋たちに笑われ、惨めな思いをしてきた。

それから八月最後の日曜日までは本当にあつという間だった。その日、クリストフはルネに頼み、村の教会でキリストの子として洗礼を受けた。彼は晴れて望み通りのカトリック教徒になったのだ。帰省していたロマンはそのことを知るなり、これまで見たことの無い恐ろしい表情を浮かべて、クリストフに「僕は忠告したよな」と低い声で言った。クリストフは彼の言うことには耳を傾けず、ただ自分がルネと同じカトリック教徒になれたことが嬉しいと言わんばかりに、不気味に笑うだけだった。

入学許可と洗礼（後書き）

この章はもうちょっと続くけど、クリストフの身边についてはこれで一旦終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4197t/>

ブランシャール家の人びと

2011年9月3日03時36分発行